

42448

教科書文庫

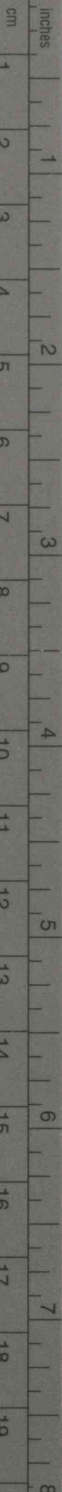
4
810
A2-1941
20000 67122

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



教科書文庫
4
810
42-1941
2000067122

女子新國文

新改制

卷三



資料室
文部省檢定濟

高等女學校、實業學校國語科用 昭和十六年十二月六日

女子新國文

新改
版制

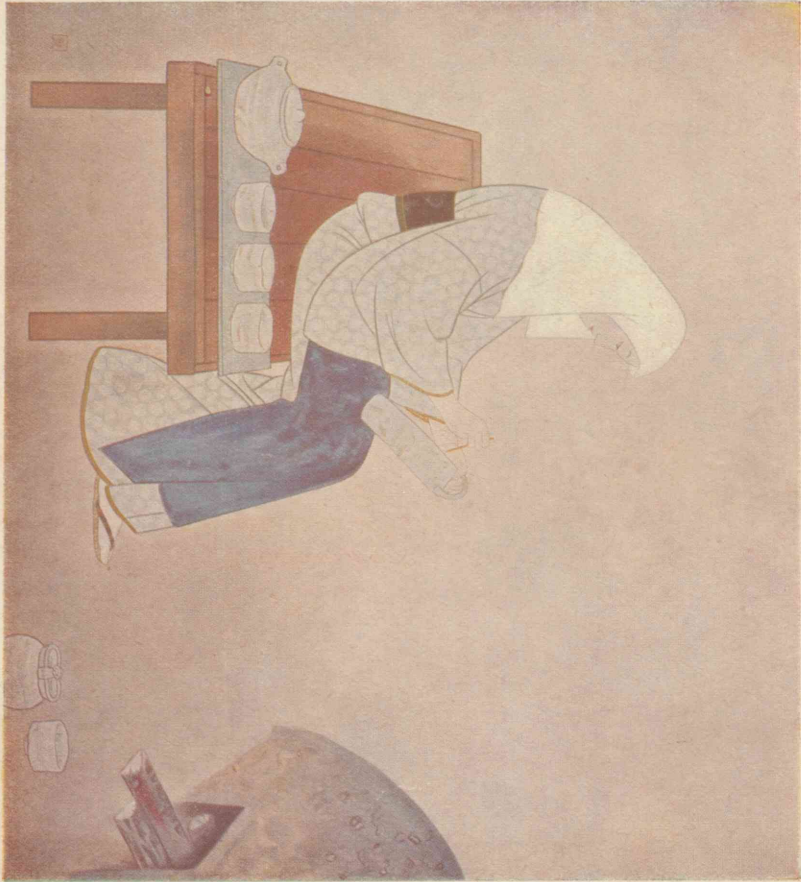
文學博士 芳賀矢一 編
東京帝國大學教授 橋本進吉 訂補
文學博士

東京會社 富山房發行



教科書文庫
4
810
42-1941
2000067122

46
810
BB16



大田垣趣月 羽石弘志筆

広島大学図書

2000067122



女子新國文 改制新版 卷三

目次

一 四方の海明治天皇御製	二
二 明治天皇の御製に就いて	五
三 恵まれた國土	九
四 告天子	三
五 安壽姫	三
六 お遍路さん	三
七 篤實	三

八 太陽出現(詩)…………… 與謝野晶子… 四
 九 スポーツと人生…………… 東 龍太郎… 四
 一〇 最後の一躍…………… 人見絹枝… 四
 オリンピック大會(自修文)…………… 山川 建… 四
 一一 繪畫の感化…………… 那珂通高… 七
 一二 同情…………… 戊
 一三 太田垣蓮月尼…………… 田中嘉三郎… 八
 一四 人の新盆に書翰文…………… 佐佐木信綱… 九
 一五 魂祭の頃…………… 埴原久和代… 九
 天の河(自修文)…………… 山本 一清… 一〇
 一六 幸福…………… 栗原古城… 一〇

一七 たのしみは(短歌)…………… 橘 曙 覽… 二一
 一八 親の慈愛…………… 柳澤洪園… 二三
 一 親の慈愛…………… 一三
 二 朝 顔…………… 一五
 三 世渡る業…………… 一六
 四 土器賣る翁…………… 一八
 一九 東郷元帥とその母その一…………… 小笠原長生… 二〇
 二〇 東郷元帥とその母その二…………… 小笠原長生… 二九
 二一 偉人野口英世…………… 二五
 母を故國に省みて(自修文)…………… 野口 英世… 二四
 二二 蟲 賣(詩)…………… 伊良子清白… 二五

二	我が家の富……………	徳富健次郎	一五
二四	清淨の國……………	大町桂月	一五
二五	祖先を崇び家名を重んず……………		一六

附録

國語假名遣表

女子新國文

改制
新版

卷三

君のため世のためなにか惜しからん棄ててかひある
命なりせば

宗良親王

君のため民のためぞと思はずば雪も螢もなにかあつ
めん

藤原師兼

など波風の...さ
わぐらん

おきなや...山田
もるらん

一 四方の海(明治天皇御製)

よもの海みなはらからと思ふ世に
など波風のたちさわぐらん

樞原のとほつみおやの宮柱

たてそめしより國はうごかず

子らはみな軍のにはにいではてて

おきなやひとり山田もるらん

世とともに語りつたへよ國のため

いのちをすてし人のいさをを

あつき日としも

塵をすゑずもあら
なん

みをつくすこそつ
とめなりけれ

まつりごといでて聴く間はかくばかり

あつき日としも思はざりしを

よりそはんひまはなくとも文机の

上には塵をすゑずもあらなん

世の中はたかきいやしきほどくに

みをつくすこそつとめなりけれ

かざらんと思はざりせばなかくくに

うるはしからん人のこゝろは

おこたるなゆめ

後にこそ...立つ
べかりけれ

學ばなん

家とみてあかぬことなき身なりとも

ひとのつとめにおこたるなゆめ

おのがじし務ををへし後にこそ

花のかげには立つべかりけれ

おのが身を修むる道は學ばなん

しづがなりはひいとまなくとも

とこしへに民やすかれと祈るなる

わがよをまもれ伊勢のおほ神

二 明治天皇の御製に就いて

明治天皇の御製が十萬首もおありなさるといふ事は、あらゆる點に於て、東西古今の君主を凌駕し給ふ御事績の一として、驚歎し奉るより外はない。大天皇のすべての鴻業が神業である如く、これも一の神業である。古來最多作の歌人と言はれた家隆卿さへ天皇に比べ奉ればものの數でもない。歴代の敕撰二十一代集の歌の數が總數三萬數千首その幾倍の數を御一人でお作り上げになつたのは、眞に人間業ではない。かばかり多數な御製が最も多事を明治の御治世に於て、萬機御親裁の餘になつた事を考へ奉れば、その御精

おありなさる
凌駕し給ふ
驚歎し奉る

家隆
藤原家隆。鎌倉時代初期の歌人。新古今集撰者の一人。嘉祿三年(一一八九年)歿。年八十。
二十一
古今、後撰、拾遺、後拾遺、金葉、詞花、千載、新古今、新敕撰、續後撰、續古今、續後撰、千載、續後撰、風井、新千載、新拾遺、新古今の敕撰、新和歌集。

た。であらせられた

お進めあそばした

お示しになった

力の絶倫であらせられた事、何時の世、何所の國にも類例はない。皇威を四方に輝かし、皇國を世界一等國の班にお進めあそばした大業と共に、言の葉の道に於ても、空前の偉績をお示しになつた事は、億兆の欽仰し奉るところ、千代萬代かけての語草である。

御精力の絶倫にあらせられた事は言ふまでもないが、かばかり多數な御作のあつた事は、平素何等の娛樂をも近附け給はず、酷暑嚴寒の時も、一度として遊幸の仰出もなく、常に宮中におはして、唯一の御慰とせられたのが即ち和歌であつたからである。これを思へば實に恐多い事で、且またその神々しい御性格をうかゞひ奉る事が出来る。御製を拜誦

おはして

うかゞふ(観)

拜察する

し奉る者は、一言一句、これが即ち萬機御親裁の餘、お寛ぎあそばした御日常の御慰安であつた事を拜察しなければならぬ。

踐ませ給ふ

日常の御慰安の爲にお詠みあそばした數々の御詠、その風調は高く、規模は大きく、いかにも萬世一系の帝祚を踐ませ給ふ上御一人の御作とうかゞはれる。國を思ひ、民を憐ませ給ふ大御心は、常に御製の上に現れてゐる。一首の歌が米國大統領ルーズベルト氏を動かして講和仲裁に盡力させる動機となつたといふ御逸話の如きは、三十一文字の和歌が、千萬の兵馬にもすぐれた力を示したもので、和歌始つて以來未曾有な事である。まして七千萬の國民が日常拜誦し

ルーズベルト
第二十六期の大統
領(西紀一八五八
一九一九年)

これ程の貴さが、
あらうか。

て、自然に蒙る偉大な感化に至つては、何等の經典もこれに並ぶものはない。日々の御慰が直ちに國民教化の源泉となる。これ程の貴さが、何時の世、何所の國にあらうか。

明治時代の詔敕は森嚴雄大永く國史を照して、後世の國民に聖代を語り、典範を示すものである。しかし、詔敕にはそれぞれ形式があり、聖意を承けて起草する人のある事も明白である。御製は直ちに大御心から發したもので、これを拜誦する者は、即ち直接に玉の御聲を拜聽するのである。草莽の微臣まで、日々玉の御聲を拜聽する光榮を有するのは、實に我が國民の特殊な幸福である。

拜聽する

清原貞雄
國史學者。文學博士。廣島文理科大学教授。明治十八年大分縣に生れた。

爛漫として野山を飾り

妙なる音楽

三 恵まれた國土

清原貞雄

我が國は昔から豊葦原瑞穂國と呼ばれてゐる通り、地味が肥沃で、五穀が豊かに稔り、その上、位置が人類の棲息するに最も適當な緯度に當つてゐる。随つて春夏秋冬の氣候の變化が適度に行はれて、盛夏と雖も三十二度を超えることは少く、嚴冬と雖も零下一度を下ることは多くない。溫暖な春と、爽涼な秋とが比較的長く、春は櫻花をはじめ百花が爛漫として野山を飾り、禽鳥が到る所に聲を合せて囀る。秋は紅葉の錦が燦爛として山谿に輝き、鳴く蟲が千草の中で妙なる音楽を奏でる。その他夏の夕べのそゞろ歩き、冬の旦の雪の眺もまたなく、楽しく美しい。

土に我が神祕國
げは：我が神祕國
愛す：愛すべき自然
です：ある

我が國は海上に點在する島國である。随つて茫々千里に互る大平原はない、いづこを涯とわからぬやうな大森林もない。程よい大きさの山川平野が到る所にあり、海岸線も概して出入が多く、海上には所々に小島が點在して、風情を添へてゐる。げに我が國土は、此所に住む國民にとつては、恐るべき神祕でなくて、愛すべき自然である。

我が本土は列島の上に國を成してゐる關係上、大陸の一部に居を占めてゐる國々の民が屢、遭遇するやうに、他の強大國から壓迫される機會は、古來極めて稀であつた。兇暴な他民族に蹂躪され、掠奪され、一地または一國を擧げて焦土にされるといふやうな悲惨な運命に遭遇した事は、上下三

もとより(素固)

言へよう

出来なかつた
であらう

千載を通じてたゞの一度もない。これもとより我が皇室の御稜威によつて、國家が常に健全であり、國民が武勇を尙んで、たとひ我が國をうかゞふものがあつても、一舉にこれを撃退する事が出来たからでもあるが、一つには我が國が地理的位置に恵まれてゐたからだとも言へよう。

若し我が國がもつと遠い大洋の中に孤立してゐたならば、どうであらうか。よし他國の侵略は免れる事が出来たとしても、文化の進歩は望む事が出来なかつたであらう。然るに我が國は他國の文化と全くかけ離れるほど遠く孤立してはゐないのみならず、海上の交通が夙に發達した結果、古來大陸との交渉も絶えず行はれ、爲に大陸に發達した文化

かくて我が國に
至つたの
であるの

は悉くこれを輸入し、吸収して、その進歩に資する事が出来た。かくて我が國は遂に東洋文化の綜合者、大成者たる光榮をさへも擔ふに至つたのである。

まことに我が敷島の大和國は最も恵まれた國土である。我が國は神の深き思召によつて作られ、守られてゐる國であるといふ自信、即ちいはゆる「神國」であるといふ信念を、我が國民が古くから抱いてゐるのは、決して理由のない事ではない。たゞ今日に於て、人口過剩の結果、國土の狹隘を感じ、物資の不足を告ぐるに至つたのは、國家として大いに考へなければならぬ事である。今後の我が國民は、積極的には農産物の増收並びに工業の發達を圖り、且海外貿易の發展

せつかく(折角)

あめの下云々
江戸時代中期の國學者本居宣長の歌
國は おほけ
ど…うみなし
ませる 大八洲
國

薄田泣菫
詩人、隨筆作家。
名は淳介。明治十年岡山縣に生れた。
私が、いぢつて
みると、歌が降
りそいで來た

を企て、消極的には正しき節約を行ひ、無益の費を省く事によつて物資の不足を補ひ、以てせつかく恵まれた自然の樂土を擁護し、益、その樂土たる特質を發揮せしめるやうに努めねばならぬ。

あめのした國はおほけどかむろぎの

うみなしませる大八洲國

(提要日出る國)

四告天子

薄田泣菫

「ちゝばる、ちゝばる、ちゝばる……」

三月上旬の或日の正午過、私が畑に出て土をいぢつてゐ

ると、だしぬけに頭の上の空から金の鈴を振るやうな美しい歌が降りそいで来た。言ふまでもなく、雲雀が程近い麥畑の巢から離れて、中空高く飛上らうとする立ち際の歌なのだ。

私は頭を上げて空を見た。眼に痛い程きらくする日光の中を、雲雀が一羽、眞つ直に中空さして驅上らうとしてゐる。

「ちゝばる、ちゝばる、ちゝばる……」

急調子なその歌に合わせて、小さな黒つぼい二つの翼が氣忙しく羽ばたきすると、そのたびに日光が金粉のやうにあたりにはつと撒散らされてゐる。

日光が……撒散らされてゐる

彼は……突進んで行くのだ

その藝術家氣質は……許さない



告 天 子

雲雀は歌謡の精霊である。彼はそこらの麥畑の土塊の間に自分の巢を営み、其所では世話好きな親鳥として、何かと細かく氣を配つてこまめに立働きはするが、持つて生れた鋭敏な感受性が春の回歸を何物よりも早く感ずるにつけて、その藝術家氣質は長く雛の側にゐる事を許さない。ので、彼は今自分の藝の慾望の動くがまゝに、空の高みを目指して、眞つ直に突進んで行くのだ。空の高みこそは、この歌謡の精霊のあけくれ欣求して止まない靈場で、鳥は其所に落著いて、始

めて他の一切を忘卻して、専念に自らの歌を歌ふ事が出来るのだ。

「ちちゆう、ちちゆう、ちゆう……」

空の歌は何時の間にか調子が變つてゐた。私は土にまみれた手をかざして、其所と思ふあたりを一心に見入つた。芳醇な酒のやうに空一杯に溢れた日光の中に、やつとの事で私はぼつちりと一つの小さな黒點を見附ける事が出来た。歌謡の精靈は、胸に抑へきれぬ春の歡喜を歌ひ出るので、さはいはしい恰好な高みを見附けたのだ。

雲雀はもう上へ昇らうとはしない。獨樂の澄みきつたやうに、じつと一所に小さな翼を浮べたまゝで、のべつに歌ひ

歌謡の精靈は……
見附けたのだ

點としか見えない

續けてゐる。さうだ、まるで獨樂の澄みきつたやうに、遠目にはじつとしてゐる一つの點としか見えないが、あの歌に織りこまれた激しい胸の鼓動はどうだ。小刻みにふるへてゐる魂の興奮はどうだ。

「ちちゆう、ちちゆう、ちゆう……」

まるで水晶盤の上へ玉の珠、金の珠をひつきりなく轉ばしてゐるやうな美しい、潤ひのある音の連続だ。情熱の火花。その火花はすばらしい速さと驚くべき自由さをもつて、あたりに撒散らされ、日光と融合ひ、まじり合つて、霧雨のやうに細かく地べたに降りそゝいで来る。

雲雀は生れつきすぐれた藝術家だ。そして多くの藝術家

その火花は……降
りそゝいで来る

と同じやうに、自分の藝に對する陶醉をもつてゐる。彼は今噴泉の水のやうに高々と胸一杯に盛上り、口をついてほとばしり出る自分の歌そのものの餘りに快活に、餘りに滑かなのに、あかず聞きほれてゐるらしい。

「ちちゆう、ちちゆう、ちちゆう……」

あの空の臺から專念に歌ひ耽つてゐる「雲切」の歌こそは、友だちの爲でもなく、また雛の爲でもない。全く歌自慢の鳥自らの爲で、たゞ懸念されるのは、さうした自己陶醉の餘りに、この歌謡の精靈がつい調子に乗過ぎてその美しい音律がむだに浪費されはしないかといふ事だけだ。

私は物好きにも小手をかざして、じつと空を見守つてゐ

懸念されるのは……
いふ事だけだ……

た。すると、さつきまでじつとしてゐた黒點が、急にゆらくと動き出した。雲雀は稍歌ひ疲れると同時に、ふと大地のあなたに青々とした麥畑の廣かりが眼に附くと、其所に残して來た巢の事を思ひ出したらしく、はたくとゆるく兩翼を飛ばたきながら、はすかひに身を沈めて、畑をさして舞ひおりようとしてゐる。

「ちい、ちい、ちい、ちい……」

「下げ」の歌だ。ついさつきまで一心に歌ひ耽つてゐた、あの「雲切」の情熱と高揚との噴泉に較べて何といふ氣拔のした、だらけた聲の連続だらう。——それも仕方がない。歌謡の精靈は、あの空の高みでゆくりなくも青草の中の自分の家を

歌謡の精靈は……
親鳥となつてゐる
のに過ぎない

雲雀は、餘りに藝があり過ぎる

思ひ出した一刹那から、せち辛い世渡に憂身をやつすたゞの親鳥となつてゐるのに過ぎないのだから。

雲雀はその親類筋にあたる雀のやうに、春の日長さを小唄一つ歌はないで、雛の世話焼や生活向の切盛に忙しい世帯やつれの仲間入りをするには、餘りに藝があり過ぎる。その藝を試みる爲には、彼は何をさし置いても、空の高みに舞上らなければならぬ。

雲雀はまた、杜鵑トトリが他の鳥の巢に卵を生みつ放しにして、所定めず旅に出るやうな放浪性を眞似るには、餘りに親心があり過ぎる。彼が空の臺ドコで歌三昧に入つてゐる最中、氣紛れにもまた麥畑をさしておりて來るのは、その棄てがたい

つぶやく(咳)

親心の爲で、彼はかうして絶えず親心と藝と、麥畑と空の高みとの間を往きつ戻りつしてその生を終るのだ。

「人間にもそれによく似たのがある。」

私は口の中でつぶやきながら、また腰を屈めて、そこらの土をほじくり出した。

五 安 壽 姫

森 鷗 外

あくる朝、二人の子供は背に籠を負ひ、腰に鎌をさして、手を引合つて木戸を出た。山椒大夫さんしょうだいふの所に來てから二人一緒に歩くのはこれが始である。

厨子王くしおうは姉の心を付つかりかねて、寂しいやうな、悲しいやう

森鷗外 醫學博士、文學博士。陸軍軍醫總監。名は林太郎。島根縣の人。大正十一年歿。年六十一。山椒大夫 由良の石浦にあたる長者。

姉は一人か
考へてゐる
らしく

毫光
佛の眉間から射す
光。白毫の光とも
いふ。

な思に胸が一杯になつてゐる。昨日も奴頭の歸つた後で、いろに詞を設けて尋ねたが、姉は一人で何事をか考へてゐるらしく、それをあからさまにはうち明けずにしまつた。山の麓に來た時、厨子王はこらへかねて言つた。

「姉さん、わたしはかうして久し振りと一緒に歩くのだから嬉しがらなくてはならないのですがどうも悲しくなりません。あなたにはわたしに隠して何か考へてゐますね、なぜそれをわたしに言つて聞かせてくれないのです。」

安壽は今朝も毫光の射すやうな悦を額にたゞへて、大きい目を輝かしてゐる。しかし、弟の詞には答へない。たゞ引合つてゐる手に力を入れただけである。

そのうちに、去年柴を刈つた木立の邊に來たので、厨子王は足をとどめた。

「姉さん、こゝらで刈るのです。」

「まあ、もつと高い所へ登つて見ませうね。」

安壽は先に立つてずんく

登つて行く。厨子王はいぶかりながら附いて行く。暫くして雑木林よりは餘程高い外山の頂ともいふべき所に來た。

姉さん
刈るの
すで
まあもつと
高い所へ登つ
て見ませう
ね



(筆吉梅井荒) 王子厨と姫壽安

石浦 京都府加佐郡由良村字石浦。大雲川の左岸。
大雲川 由良川をいふ。福知山の方から流れて由良港に注ぐ。
中山 大雲川の右岸。

安壽は其所に立つて、南の方をじつと見てゐる。目は石浦を経て由良の港に注ぐ大雲川の上流をたどつて、一里ばかり隔たつた川向ひに、こんもりと茂つた木立の中から塔の尖の見える中山に止つた。そして「厨子王や」と弟を呼びかけた。

「わたしが久しい前から考へ事してゐて、お前とも何時ものやうに話をしないのを、變だと思つてゐたでせうね。もう今日は柴なんぞは刈らなくてもいゝから、わたしの言ふ事をよくお聞き。あの中山を越して往けば、都がもう近いのだよ。筑紫へ往くのはむづかしいし、引返して佐渡へ渡るのもたやすい事ではないけれど、都へはきつと往か

岩代 今福島縣の一部。

櫟子 べんたう箱。

れます。お母様と御一緒に岩代を出てから、わたしどもは恐しい人ばかり出逢つたが、人の運が開けるものなら、善い人に出逢はぬにも限りません。お前はこれから思ひ切つてこの土地を逃げ延びて、どうぞ都へ上つておくれ。神佛のお導きで、善い人にさへ出逢つたら、筑紫へお下りになつたお父様の御身の上も知れよう。佐渡へお母様のお迎に往く事も出来よう。籠や鎌は棄てて置いて、櫟子だけ持つて往くのだよ。」
厨子王は黙つて聞いてゐたが、涙が頬を傳つて流れて來た。

「そして姉さん、あなたはどうしようといふのです。」

「わたしの事は構はないで、お前一人でする事をわたしと一緒にするつもりでして、おくれ。お父様にもお目にかゝり、お母様をも鳥からお連れ申した上で、わたしを助けに來ておくれ。」

「でも、わたしがゐなくなつたら、あなたをひどい目に逢はせませう。」

厨子王が心には烙印はくしんをせられた、恐しい夢が浮ぶ。

「それはいぢめるかも知れないがね、わたしは我慢して見せませう。金で買つた婢はなめをあの人たちは殺しはしません。多分お前がゐなくなつたら、わたしを二人前働かせようとするでせう。お前の教へてくれた木立の所で、わたしは柴

烙印をせられた云

山椒大夫の許を逃
出さうとして失敗
し、見せしめの爲
といつて烙印され
た夢を見た事をい

あの人たちは
殺しはせん

おりて二人
は置いてた

を澤山刈ります。六荷までは刈れないでも、四荷でも五荷でも刈りませう。さあ、あそこまでおりて行つて籠や鎌をあそこに置いて、お前を麓へ送つて上げよう。」

かう言つて安壽は先に立つておりて行く。
厨子王は何とも思ひ定めかねて、ぼんやりして附いてお
りる。姉は今年十五になり、弟は十三になつてゐるが、女は早
くおとなびて、その上ものに憑よかれたやうに聰とまく賢さかしくな
つてゐるので、厨子王は姉の詞に背くことが出來ぬのであ
る。

木立の所までおりて、二人は籠と鎌とを落葉の上に置い
た。姉は守本尊を取出して、それを弟の手に渡した。

「これは大事なお守だが、今度逢ふまでお前に預けます。この地藏様をわたしだと思つて、護刀と一緒にして大事に持つてゐておくれ。」

「でも、姉さんがお守がなくては。」

「いゝえ、わたしよりはあぶない目に逢ふお前にお守を預けます。晩にお前が歸らないときつと討手がかゝります。お前が幾ら急いでも、あたり前に逃げて行つては追附かれるにきまつてゐます。さつき見た川の上手を和江といふ所まで往つて、首尾よく人に見附けられずに向河岸へ越してしまへば、中山までもう近い。其所へ往つたら、あの塔の見えてゐたお寺にはいつて隠しておもらひ。暫くあ

お前が歸らないと
討手がかゝります

和江
大雲川の左岸、中
山の向ひ

そこに隠れてゐて、討手が歸つて來た後で寺を逃げてお出で。」

「でも、お寺の坊さんが隠して置いてくれるでせうか。」

「さあ、それが運試しだよ、開ける運なら、坊さんがお前を隠してくれませう。」

「さうですね。姉さんの今日おつしやる事は、まるで神様か佛様がおつしやるやうです。わたしは考をきめました。何でも姉さんのおつしやる通りにします。」

「おゝ、よく聽いておくれだ。坊さんは善い人で、きつとお前を隠してくれます。」

「さうです。わたしにもさうらしく思はれて來ました。逃げ

おゝよく聽いてお
くれだ

て都へも往かれます。お父様やお母様にも逢はれます。姉さんのお迎にも來られます。」
厨子王の目が姉と同じやうに輝いて來た。

早くお出で



森 鷗 外

たかと思はれる。

泉の湧く所へ來た。姉は櫛子カシゴに添へてある木の椀わんを出し

「さあ麓まで一緒に行くから早くお出で。」

二人は急いで山をおりた。足の運びも前とは違つて、姉の熱した心持が暗示のやうに弟に移つて行つ

て、清水を汲んだ。

「これがお前の門出を祝ふお酒だよ。」

かう言つて、一口飲んで弟にさした。弟は椀を飲みほした。

そんなら姉さん御機嫌よう

「そんなら姉さん、御機嫌よう。きつと人に見附からずに中山まで參ります。」

厨子王は十歩ばかり残つてゐた坂道を、一走りに駆けおりて、沼に沿うて街道に出た。そして大雲川の岸を上手かみへ向つて急ぐのである。

安壽は泉の畔ほとりに立つて、並木の松に隠れてはまた現れる後影を小さくなるまで見送つた。そして日は漸く午ひるに近附くのに、山に登らうともしない。幸に今日はこの方角の山で

同胞を捜しに出た

木を樵る人がないと見えて、坂道に立つて時を過す安壽を見咎める者もなかつた。後に同胞を捜しに出た山椒大夫一家の討手が、この坂の下沼の端で、小さい藁履を一足拾つた。それは安壽の履であつた。

(山椒大夫)

萩原井泉水

俳人。名は藤吉。明治十七年東京市に生れた。

音が 聞える

弘法大師

平安時代初期の高僧。名は空海。讃岐の人。承和二年(八四〇年)延喜二年(八六二年)弘法大師の諡を賜はつた。

六 お遍路さん

萩原井泉水

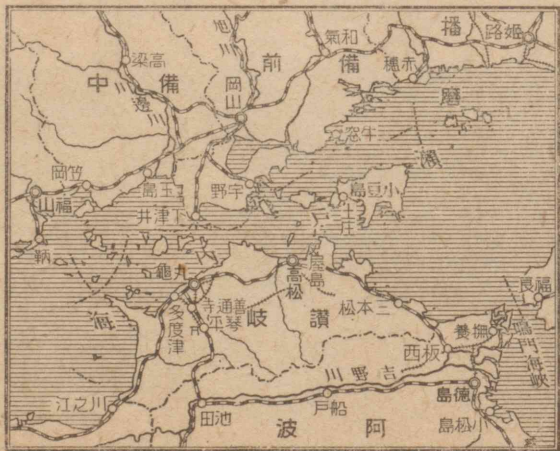
りんく〜といふさえた音が、遙かの山裾からこの山荘にまで聞える。それはお遍路さんが振る鈴の音なのだ。――「お遍路さん」とは何といふ親しみ深い言葉だらう。――四國八十八箇所に遺された弘法大師の靈場を遍歴して歩くのが

小豆島
香川縣小豆郡。瀬戸内海中にある最も大きな島。

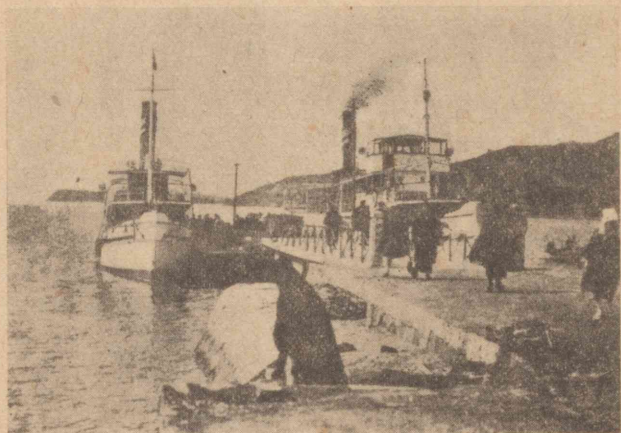
…にしても

土庄港
小豆島第一の都會。岡山から十八哩。高松から十二哩。

お遍路さんである。しかし、いかに信仰の爲とは言へ、四國を一巡する事は、日數からも、勞力からも、殊にお遍路さんに多い女的身として、大抵の事ではないので、四國の代りに小豆島にある八十八箇所の靈場を一巡すれば、同じ功德を積得る事とされてゐる。島四國といふ言葉も出來てゐる。島四國の遍路にしても、女の脚では六七日かゝるといふ事である。多くは岡山から、若しくは高松から來るお遍路さんは、船で土庄港に著く。其所から發足



して、第何番といふ札所の順に參拜の路をたどるのである。



士 庄 港

それは繪である。美しい事である。この山莊にまで聞えるり

菅笠を被り、裾をからげて、背には手廻りの物を太い紐で負ひ、胸には自分の名を書いた札を入れた札箱をつるして、塔婆形に刻んだ金剛杖を持つて、寂しいのは一人二人多いのは何十人と團體をなして、銀のやうな日の光を浴びながら、海の近い麥畑の中の路をたどつて行く。

頃も日も……四月
のどか(長閑)

んりんといふさえた鈴の音は、彼等の先達が振つてゐるものとみえる。お遍路さんは時を限らないが、風も日ものどかに、路を歩くのによい氣持であり、また農事も比較的閑な四月頃に一番多く見受けるといふ事だ。この頃島に著く船は、日に何百人といふお遍路さんを渡して来る。一體遍路といふものは、何時頃から始つたものか知らないが、大師の教門を弘くする上から言つても、各自の信念を厚くする上か



お 遍 路 さ ん

ら言つても、まことによい事だと思ふ。そればかりではない、お遍路さんは到る所で愛せられる、また恵まれる。お遍路さん同志もまたお互に遍路であるといふ事の爲に信頼する、また扶助する。これが實によい事だと思ふ。未知の人たちが連になつて親しんで行く。路を教へ合ひ、足らぬ物を足し合つて行く。お遍路さんが路傍の家に荷物などを置けば、どの家でも喜んで預つてくれる。決して紛失しないといふ事だ。これは遍路としての誰もが、一つの眞實の道に繋がつてゐるといふ意識から來るのだ。この道に參ずるには、知識も、修養も資格も、そんなものは何もいらぬ。婆さんでも娘でも、男でも子供でも、たゞ一つの道を信ずる事によつて、この尊

これは……意識から來るのだ

……そんなものは何もいらぬ

い心持に一致する事が出来るのだ。南無大師遍照金剛と讃仰する聲が出て來るのだ。これは實に美しい事だ。争鬭と欺瞞とに満ちた社會の内にあつて、信頼と扶助とに心を合せて行くくらゐ美しい事が他にあらうか。この島の春を賑はすお遍路さんは、繪としてだけ美しいのではない。彼等が愛し合ひ信じ合ふ事に生きるが故に美しいのである。そしてこれは獨りお遍路さんの上の事だけではない。私たちは皆人生の遍路である。銘々に自ら負はねばならないものを負うて、自分の名前を書いた札を撒散らしながら、自分自分の路を遍歴してゐるのである。しかも私たちの周圍には、このお遍路さんに見るやうな信頼と扶助とが行はれ

……事が……他にあらうか

負うて

(私たちは……遍歴してゐるのである)

私は思ふ、私たちが
學ばねばならぬ

悉くが心とし
ないまでも

てゐるだらうか。私は思ふ、私たちはこのお遍路さんに學ばねばならない。遍路といふ行事を遺した弘法大師の暗示を感じなければならぬ。そしてたとひ人間の悉くがお遍路さんの心を心としないまでも、私たちはまづ彼等の信と愛とを以て人生を歩きたいものである。

(山水巡禮)

七 篤 實

橋 南 谿

橋南谿
江戸時代末期の醫師、國學者。本姓名は宮川春暉。伊勢の人。文化二年(一四六五年)歿、年五十三。
道連になりぬ
行きたりしに

余が諸國を巡りて、備後國を通りし時、百姓と見ゆる年老いたる男二人、ふと道連になりぬ。山の名里の風俗など尋ね問ひて行きたりしに、その一人、我が野服を著し、方頂巾を戴きたるを怪しみて、「いかなる人にて、いづくよりいづくへ行

醫者なるが

遊歴するなり

さてもたのもしき
御人や

あはれ都近くもあ
るならばなど、
歎き居り候

あはれにも候へば
取らせ給ひて
彼等が心をも慰め
給はらばや

き給ふにか」と問ふ。我は都方の醫者なるが、醫術修業の爲に諸國を遊歴するなり」と答ふれば、「さてもたのもしき御人や。我等が住む里は向ふの山の奥なるが、親しき家の女房に奇妙なる難病ありて、はや二年ふたとせになれるが、近きあたりに住み候へば、聞くもいふせし。その家にもいろ／＼と醫療盡さざる事はなけれど、つゆばかりの驗しるしもなく、今ははや危く見え候。かゝる山深き片田舎なれば、名高き醫師も候はず。あはれ、都近くもあるならばなど、親類の者どもは歎き居り候。今日のははからずもめぐり合ひて、京都の御醫と承り候へば、親類どもが常々の言葉も思ひ出されて、あはれにも候へば、何とぞ賑ばかりにても取らせ給ひて、彼等が心をも慰め給はら

尾道
今廣島縣尾道市。

行けども行けども

饑ゑ

ばや」と誠の心言葉に出でて、また餘儀もなく見えたりしかば、余もこの道修業の事なれば、いと易き事なり。とうけがひて、かの者どものしりへに従ひて、尾道の二三里ばかり此方より、右の方へ分入りぬ。

鹿狼の通ふ如き細路を、谷へ下り峯へ上りて、行けども行けども程遠きに、日影も稍傾きて、腹饑ゑ、足疲れたれば、僕は腹立ちて、程も知れぬいたづら事とつぶやく。とかうなだめて行く程に、やうく〜に到り著きぬ。とある山あひのいと寂しき里にて、本郷といふ所なり。

その家に入れば、病者は五十ばかりなる女にて、その夫を六兵衛といふ。案内の者しか〜の由を言へば、家内皆驚き

腹裂くる心地

おろかに

命の限りも遠から

助かるべくも思ひ候はねど

ゆかしくこそ候へ

悦ぶ。病者は去年の冬より、難治の病にかゝり候ひしが、次第に重りて果ては腹裂くる心地して、苦しみ譬へん方なく、日月々に病つものり、春の頃よりは一入にて、横に臥せば下腹裂くるが如く、立てば苦しく、坐すれば堪へがたし。それ故、晝夜たゞこたつの櫓に兩手をつかへ、立ちながら俯きてをる時のみ少し心安らかなるやうなれば、春以來はかた時も坐せず、臥さず、たゞ晝夜食ふにも、眠るにも、この通りなり。その苦しみなかく〜申すもおろかに候。近き頃は殊に悪しく候へば、命の限りも遠からじと、一日も早く臨終をとのみ待居り候。命の事は助かるべくも思ひ候はねど、都の人と承れば、ゆかしくこそ候へ。何とぞ一日なりとも、この苦しみを助け

得しめ給はゞ

流せるさま

生きたる人

給ひて、横に臥して安らかに臨終するを得しめ給はゞ、上もなき御惠と涙を流せるさま、げに見るさへあはれなり。晝夜立ちて俯きをれば、足は柱の如く腫氣ありて、顔もまた眼ぶち腫れ、額も浮きて、生きたる人の如くにもあらず。一しきり一しきり腹張り來る時は、苦しみの聲隣を動かし、聞く者すら堪へかねたり。病體はまことにかくの如く危けれど、その脈に見どころありければ、急ぎ藥を與へ、なほ藥湯をもて腰より下を漬し、種々の療術を用ひしかば、やがて通利出で來て、始めて横さまに臥す事を得たり。なほしなとの療治を加へ、この以後に用ふべき藥方を委しく書きしるし、用ひ方などまでも細かに傳へ置きて、その家を辭して、數里の深山

三原の城下
今廣島縣御調郡三原町。淺野氏の舊城下。

誠ありたればこそ
：ならぬ

し給ふべからず

つゝが(恙)

六條
今京都市下京區。

を分出でて、三原の城下に著きぬ。

三原にてこの物語をせしに、さても危き事なりき。御心に誠ありたればこそ佛神の助もありて、誠の事に逢ひ給ふならぬ。かくの如き事は多くは盜賊の詐る事にて、旅する人ななき深山に連行き、刺殺して金銀衣類を奪ふ事珍しからず。この後は必ず粗忽のふるまひし給ふべからず」と言ひけるにぞ、始めて心附きて、つゝがなかりし事を喜びき。

それより諸國を巡り、二年を過ぎて京に歸りゐたりしに、或日六條の旅宿のあるじ訪ね來り、「二兩年以前、九州へ赴き給ひし御醫者はこなたなりや」と問ふ。いかなる用ぞ」と聞けば、備後國より六兵衛といふ百姓一人上り來り候ひて、下に

見覺えたり

見當て候へば

言へば

市の字の附きたる御醫師を聞及ばずや。何とぞ尋ねくれよ。去々年しかくの事にて高恩を受けたれば、御禮の爲に來りたり。その御名は聞かざりしかども、荷物のさげ札に市の字ありしを見覺えたり。と申す。手がかりもなき尋ねやうかなと存じ候へども、その志殊勝にも候へば、まづ表札を見巡りて、市の字を見當て候へば、お尋ね申すなり。と言ふにぞ、その事あり。と言へば、乃ち歸りぬ。その次の日、かの六兵衛、旅宿のあるじと同道し來りて、備後疊を自ら持ちて禮物とし、さても過ぎし年は不思議の御縁にて、妻なる者御療治に逢ひ、命はなきものと覺悟致し居り候ひしを、その日よりして驗を得、仰せ置かれし日限の如くに、さしもの難病も平癒して、

御名さへ承らず候

逢ひ奉るべしとは
はからず候へども

東寺

京都市下京區九條
金光明四天王教王
護國寺といふ古
義眞言宗東寺派の
本山
候うて



橋南 裕 像

再び常體の人となり候ひぬ。近所の者の行きあひより始りて、御名さへ承らず候へば、弘法大師の來らせ給ふなりとのみ、一村にて評判致してこそ候へ。京を尋ねたりとも、逢ひ奉るべしとははからず候へども、命助かりし御高恩に、ひと言の御禮も申さざる心のうちも安からず。若し逢ひ奉る事かなはずば、東寺へにても参り候うて、弘法大師様へ御禮申して歸るべしと存じ極めて参り候ひしなり。まづは尋ね當てて、日頃の本望を遂げ候。とて、眞實顔色に現れたり。余も嬉しくて、暫しもてなし慰

いかで……尋ね來
べき

めて、歸し遣りぬ。
都近くウチの者ならば、百里に餘れる海山を、いかではるど
尋ね來ウチべき。邊土ウチの民の篤實トウなる事、感ずるにもなほ餘りあ
り。

(西遊記)

與謝野晶子
詩人、歌人。明治
十一年堺市に生れ
た。

八 太陽出現

與謝野晶子

薄暗がりの地平に
大火の祭。
空が焦げる。
海が燃える。
珊瑚紅から

黄金の光へ、
まばゆくも變りゆく
焰の舞。

曙の雲間から、
子供らしいまろい頬ほを、
眞赤に染めて笑ふ
地上の山山。

今、焰ヒはひと揺れし、
世界に降らす金粉。
不死鳥フエニクスの羽ばたきだ。
太陽が現れる。

東龍太郎
醫學博士。東京帝
國大學教授。明治
二十六年大阪市に
生れた。

九 スポーツと人生

東 龍太郎

スポーツは單なる遊戯ではない。勿論争闘でもない。スポ
ーツを閑人の時間つぶしや、見物人を喜ばせる興行物だと
解する人があれば、それは映畫の劍劇を武道の極意と早合
點するの愚に等しい。

スポーツは人を作る。これが我等の信條である。「正しく」強
く「明るく」生きる事を冀ふ人々には、一日も早くスポーツ道
に悟入する事をおすゝめする。スポーツ道と言つても、これ
は決して淺薄な外來思想ではない。我等の誇とする日本武
士道の傳統的精神と一體である。たゞ武士道が武士の獨占

人々には……おす
すめする

スポーツには……
ふるまひは嚴禁で
ある

物視されたのに引換へ、スポーツは階級と年齢と境遇とを
超越して、萬人の體得すべき、そして體得する事の出来る道
である點が、遙かに現代の世相に適應してゐる。スポーツは
誰もが求めて獲られる心身の糧である。

スポーツには卑怯未練なふるまひは嚴禁である。フェア・プ
レーは即ち尋常の勝負である。しかし、自分の非を隠して他
人の事を發いたり、甚だしいのは、自分の罪まで人に負はせ
て、一向恥づかしいとも思はないやうな人間の多い今の世
の中では、正しいスポーツの勃興と、スポーツ道の普及とは
この上ない結構な事である。

スポーツマンはあくまで謙讓でなくてはならない。お山

の大將おれ一人といふ氣分は大禁物である。勝つて驕らず、負けて憂へずといふ心掛が肝要である。どこまでも謙讓の美德を發揮すると同時に、卑屈に陥つてはならない。

スポーツには度胸と闘志とが重大な要素である。度胸と言へば、俎上の鯉と幡隨院長兵衛との姿が眼に浮ぶ。度胸は、要するに事に當つて心の平靜を失はぬことである。水鳥の羽音に腰を抜かした平家の若武者の轍を踏まぬにある。ほんたうの度胸は自信から生ずる。自惚や驕慢と混同してはならない。

闘志は負けじ魂や瘦我慢もその一面と見られる。腹がへつてもひもじうなく、武士は食はねど高楊枝でゐられるの

幡隨院長兵衛
本名は塚本伊太郎
江戸時代初期の俠
客。慶安三年(二
三〇年)歿。年
三十七と傳へられ
る。

は、闘志の消極的半面である。強い意志の力の發露が、火の出るやうな闘志となるので、薄志弱行の徒に服用させたい薬である。

悪戦苦闘、精根盡きて倒れたマラソン競走の國際選手が、「日本の爲だ、しつかりせよ」といふ激勵の言葉を耳にし、日章旗を眼にした瞬間、猛然と起上つて決勝線に倒れこんだといふ物語は、超人間的な闘志の働を如實に語るものである。勇猛な闘志があつて、始めてほんたうに人事を盡す事が出来る。

殊に團體的なスポーツは常に自我を没卻しなければならぬ。共同生活には、大なり小なり犠牲の覺悟がいる。全體

國際選手が……瞬
間……倒れこんだ

大なり小なり……
いる

精神の脱け
たスポーツの規律
度と規則
ない競技
暗雲
あはの節

の一部としての自己以外に出てはならない。我利々々亡者
拔駈けの功名争は共同作業にとつて獅子身中の蟲となる。
自己一身の利害の前には、社會國家を無視するやうな輩が
續出するとすれば、それはスポーツ道の精神未だ天下に普
く行渡らない爲である。スポーツに節度と規律はつきもの
である。精神の脱けたスポーツ、節度と規律のない競技は、我
等の正しいスポーツの光をおほひ隠す暗雲である。

要するに、スポーツの神髓は人を作るにある。しかも「正し
く」「強く」「明るい」人を作る。スポーツこそは新興日本の要求する人
を作る事が出来る。競技を以てスポーツの全部と考へ、勝敗
をスポーツの眼目とするのは、大きな誤である。スポーツ本

品性は
養はれ
あるもの
は
培は
れ
て
來
る
観
念

ジエームス
(西紀一八四二—
一九一〇年)

來の使命は「競技」ではなくて、寧ろ「練習」そのものにある。即ち
人に勝つに先だつて、まづ己に克つ事である。

「英國の力は、英國國民個人々々の品性の力に胚胎してゐる。
そしてこの個人の品性は、英國國民のすべての階級を通じて
スポーツに熱中するといふ、國家的スポーツ崇拜ともいふ
べき觀念に培はれ、養はれて來たものである。」とアメリカの
心理學者ウイリアム・ジエームスは喝破した。

我が國の過去に於て、あらゆる國家的活躍の奥には、常に
武士道の傳統的精神が一脈連綿と續いてゐるのを見る。現
在我等の高調するスポーツ道は、まさに時代相に順應した
武士道に外ならない。

人見絹枝
運動家。岡山縣の
人。昭和六年、
年二十五。

一〇 最後の一躍

人見 絹 枝

あとに残つた第五回目、今度こそ跳ばねば、また今日もあのスタンドの優勝マストに英國の國旗を翻ひかされるのだ。第六回目もあるが、それには殆ど力が盡きて、十分に脂エリが乗らないのが常例だ。

この五回目、私は案ぜずにゐられなかつた。更に二回の歩測をやり直した後、私はその當日、私の持つすべての力を集中して一躍を試みたのであつた。しかしその五回目の成績は甚だ悲惨な結果を來した。みじめとか残酷とか言うても言ひ足らぬものであつた。

しかしその成績を
五回目に來した結果

両手を上方に引上げた
と、しした
やすり(鍔)



人見 絹 枝

踏切脚は更に合はない。しかもその時には、左脚が踏切板にわづかに掛つたばかりであつた。身體に十分ばねのつかぬ上に、私は心にあせりを覺えた爲、空中で行ふべき挟み跳はさみに無理が出來て、平常の通り著陸前に、脚を前方に延すと同時に、両手を上方に引上げた。ようとしたその時、やすりやすりのかゝつた鋭い靴のスパイクで、自分の右手の掌てのひらを六箇所も深く引裂いてしまつた。記録は五メートル三一。私は何といふ立場に置かれたの

であらうか。審判員の持つ巻尺のメートルの度盛をじつと見詰めた時、私には殆ど希望も力もなくなつた。

脱ぎ棄てたオーバーシューターを著た下に傷ついた手を隠しながら、黒田マネージャーの傍に戻つて來た。

スエーデンのプラチーノ選手は見事五メートル一六のレコードを示す。しかし七萬近い觀衆はちよつと拍手を送つたばかりで、またすぐ元の静けさに返つてしまつた。何のどよめきもなく、場内の空氣はいやな程落著いてゐる。今にも一大變事でも起るかの感を持たせる。

槍投もファイナルに進んでゐる。砲丸投のファイナルは最早終つたらしい。觀衆七萬の人たちは槍投の結果にも、砲丸投

スエーデン（瑞典）

ファイナル（決勝戦）

の勝負にも目もくれず、たゞあと一回残されたガン選手と私との決戦を待つてゐる。英國勝つか、また日本のこの私が勝を取るか……。鳴りをしづめてその結果を待つてゐるのであつた。

ガン嬢の面には軽い悦の色が浮んで見える。人見さん、しつかりやれ。あともう一回あるからな。と言つて下さる黒田マネージャーの顔。それはもう常人とは思はれぬ程青くなつて、その唇は頻りに痙攣してゐる。私の心はこの時どうであつたらう。あとに残つたのはほんたうに一回きり。この一躍で私は今日の試合を閉ぢねばならぬのだ。どのやうな事があつても、この一躍に成功しなければならぬ。さもなければ

あともう一回あるからな

ば、みすく、英國の國旗がまた今日もあの最高の旗竿の上に吊されて、ゴッド・セイブ・ゼ・キングの歌を聞かされるのだ。昨日から見あきる程英佛國旗は揚つてゐる。どうか今日たつた一度……一度だけでよい、日本の國旗を揚げたい。それだけかなへてもらふ事は出来ないであらうかと、繰言くりごをする外はなかつた。

若し自分を救ふ神様があるならば、私の右脚についてこの一躍を助けて下さい。あゝ、今日こそ日章旗を揚げたいものだ……。若しこの一躍が不成績に終つたならば、故國にゐる父母等がどんなに悲しむであらう。この間も郷里の方からの手紙に、「お前が家を出てからといふものは、母と姉とは

神様
が
ある
ば
助
け
て
下
さ
い

跳
べ
る
だ
け
よ
う
跳
んで
み
よ
う

お前の勝利を一日に二度氏神様に詣つて祈つてゐる。國の爲だからしつかりやつておくれ」といふ意味のものが二通までも届いてゐるのである。走巾跳できつと勝て！と言つて下さつた方々にも、世間の人たちにもどのやうに言つて詫びられよう。お詫だけではすまない。あゝ、最後だけを……。私のこの苦しい氣持を七萬の觀衆や、百六十名近い各國の選手へは勿論、たゞ一人の黒田マネージャーにさへも話す事が出来ず、一人で苦しんでをつた。その瞬間、泣くにも泣かれなかつた。

あゝ、最後だ。跳べるだけ跳んでみよう。

覺悟はして立つたが、しかし、私には自信も希望もすべて

絶たれてしまつたあとであつた。かうして最後に助走路のスタートに立つた時、私は急に思ひ出した。

七月八日午後八時、下關行の特別急行で、この征途の門出に上つたあの時、大阪驛で漸く暮れたばかりのホームのベルのけたゝましい音を後にして、汽車が動き出さうとした時、木下博士が「人見さん、もうそんな寂しい顔はよしてくれ。先生だつて一人で年若い娘を旅立たせるのは心配だ。しかし君も二十歳だ。この大任を果して歸る日がきつとある事と思ふ。僕はあなたに何か餞別をやりたいが、何も別にこれといつて與へるものはない。たゞこの作つて上げたユニホームとパンツ、これは先生だと思つて、向ふに行つて身に著

木下博士
醫學博士木下東作
當時日本女子ス
ポーツ聯盟會長。

ユニホームとは
パンツこれと
先生だと思つて

けて競技場で奮闘してくれ。あなたの苦しむ時はきつと先生も案じてゐると思へ。それから今一つある。それは向ふに行けば、一人の日本人である黒田氏にも話す事が出來ず、外に誰にも知らせられぬ、泣くに泣かれぬ時もあるだらう。しかし、その時はあなたは目を閉ぢて日本の神様を拜め。きつとあなたは救はれる。……なあ、きつとさうするのだよ。元氣で行つてお出で。かう言つて下さつた慈父にも勝るその御心を思ひ浮べて、私は靜かに目を閉ぢて、「どうか一度です。跳ばして下さい。」と夢中に祈つた時、今までこらへてをつた涙が、急に兩頬を傳はるのでした。拭いても、涙は絶えない。側にあるガン選手に對して、恥づかしい程涙が出る。

助走の三十メートル餘の地面がぼんやり霞む。

夢中で走り出した。その最後の一躍……今まで合はなかつたその脚も、八寸の踏切板に一分一厘の違ひなく、右足が強くあたつた。しめた。……跳べた。始めて跳べた。記録五メートル五〇……。私はすぐに大聲を出して喜びたかつた。しかしよく考へれば、私の後にはまだガン嬢の一躍がある。

ガン嬢を見た時、同嬢は頻りに深呼吸をしてゐる。そして終に走り出した。その時、私はその助走の有様も何も見ない。たゞ八寸の踏切板を見詰めた……。今も私の眼に明らかに残るそのガン選手の左脚。踏切板の前五分ばかりでファウルになつた。

私は……喜びた

ファウル（反則）

あゝ、……初めてガン選手にうち勝つ事が出来たのだ。

アナウンサーの聲も朗かに決勝の報告がされた。

その聲の終るか終らぬうちに、今まで静まり返つてゐたスタンドの觀衆は一齊に總立ちになつて、そのスタンドを靴でたゞく音、破れるやうな拍手、暫くは止まなかつた。ハロ、人見、人見！の聲を浴びせられながら、高々と日章旗はスタンドの中空高く、君が代スライ、ツイ、ハイの吹奏裡ハイに掲揚された。

これを見た黒田マネージャーと私とは、今までの苦しみも急に嬉しさに變り、フィールドの中で泣けるだけ泣いた。多くの白人の中白人の二人ににたつた二人の日本人が、日章旗の下で泣いた。その涙は、ほんたうに美しいものに違ひなかつた。この時こ

白人の二人に
たつた二人が
泣いた

そ初めて自分は日本の天皇陛下の赤子の一人になり得たものと思つた。
(スバイクの跡)

自傳文

オリンピック大會

山 川 建

山川建
男爵。元文部省專門學務局長。明治二十五年東京市に生れた。
ギリシャ(希臘)
再興
フランスの教育家クーベルタン男爵が再興した。

現在の國際オリンピック大會は、古代ギリシャで行はれたオリンピック大祭を、西紀一八九四年に再興したものであるから、これを現代オリンピックといひ、古代のを古代オリンピックと稱へてゐる。古代オリンピックはギリシャの主神デウスの神靈を慰める爲、四年ごとに一回、神前の庭でオリンピック大祭を催し、専ら高跳、競走、槍投、圓盤投、角力などの如きスポーツを行つたのであるが、なほその外に音楽、美術、辯論などの競争も行はれた。この大祭は大抵夏季に行はれたもので、祭典の行はれる一箇月の間は、ギリシャ全

小競合
小さい争。ごたごた。

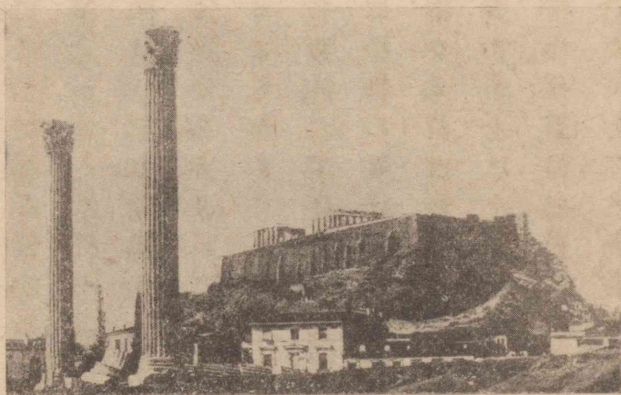
敢へてする
おしきつてする。
無理にする。
制裁
こらしめ。習慣、規定に反いた者に加へる惡報。
心理的妙味
氣持の上から考へての面白味。

土に互つて一切の争鬭を禁止して、絶對の平和が保たれるやうになつてゐた。當時のギリシャは小國が分立し、互に國力の擴張に餘念がなく、常に小競合や戦争が絶えなかつた。そこで、四年に一回は一定の期間だけでも鬭争を止め、平和の氣分を得たいといふ所から、オリンピック大祭が行はれたとも謂はれてゐる。

ともかく、オリンピック大祭にはギリシャ全土から、各國それ／＼代表的の選手を出して盛んに競技を行ひ、その期間は全ギリシャに平和の氣分がみなぎつてゐた。この時若し争鬭を敢へてする者があれば、神慮に逆らふ者として、嚴しい制裁を受けた事は事實である。スポーツに依る争は行はれたが、國家間若しくは個人間の争議は絶對に禁止されたといふのは、一種の心理的妙味を含んでゐる。また競技に對する態度は極めて眞面目で、選手に選ばれる者は競技の達人であると同時に、品性や人格もりつばで

選定權
選び定める権利。

殺伐
あらう／＼しいこと。
行く所まで行く
云々
最後の最後までやる
るといふ激しいこと。
陋劣
いやしくおとつたこと。



塔クッピンリオ代古

なければならず、また體格も強健壯美であつて、謂はゞすべての點に於て代表的青年であつた。さうして、その選定權は官吏に屬してゐたといふのも面白い。

また競技の行ひ方は頗る眞劍で、體力の盡きるまで、氣力の果てるまで熱心に争つたもので、拳闘などでは死に到るまで戦つた者もあつた。何しろ今日のやうに競技のやり方が科學的に考へられたものではなく、また人情も殺伐であつたから、行く所まで行くやうな激しい競争が行はれたのである。しかし、當時に於ても卑怯なふるまひや陋劣

正々堂々の云々
りつぱ、態度を以て……

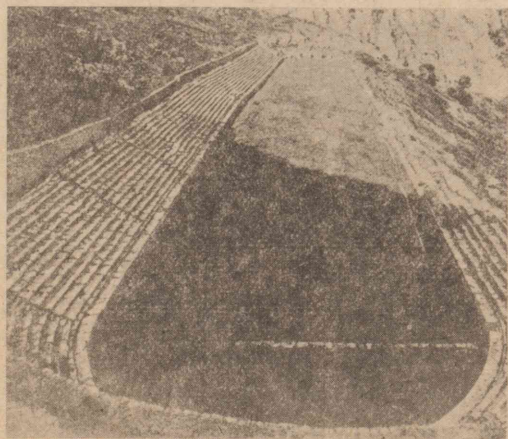
表彰
世に廣くほめあらはすこと。

オリーブ(橄欖)

褒賞
褒美、賞與。
アマチュア・スポーツ(非職業運動)

な手段は堅く戒められ、いはゆる正々堂々の陣を布いて、全力を傾けて相競ふといふフェアプレーの精神は十分に發揮されてゐた。

かくの如くであるから、競技に優勝した者は絶大の名譽を負ふのは言ふまでもなく、その名譽はギリシヤ全土に響き渡つたのである。しかし、これを表彰する方法は極めて精神的で、神前に植ゑてあるオリーブの葉で作つた冠が授けられるに過ぎず、決して物質的の褒賞を授ける事はなかつた。こゝにも今日のアマチュア・スポーツの精神が輝いてゐたのである。かく古代オリンピックは神に捧



ムアダタス・クッピンリオの代古

平和的施設
平和を目的とした
設備。

功利的の氣分
目前の利益幸福を
主とせねばやまぬ
といった氣持。

興行化
入場料をとつての
見せ物に向くやう
にする。

地に墮ちる
全く廢れる。

消息
移り變り。

げる神聖な祭典として、ギリシャ民族の平和的施設として、また純
眞なスポーツ精神の發揚として、はたまた堅實な心身鍛錬の試
煉として、まことに意義の深いものであつた事は言ふまでもな
い。

しかし、その後ローマ時代に入ると、ローマ人の功利的の氣分
から、スポーツを何とか社會上に利益的に役立つものにしよう
と考へ、遂に見せ物にして、これを觀て楽しむといふ風になり、隨
つてスポーツの職業化、興行化が盛んに行はれ、外觀的に盛大を
極めたが、眞のスポーツ精神は腐敗し、純眞な青年の心身鍛錬の
美風は地に墮ちてしまつた。その結果は言ふまでもなくスポー
ツの廢滅を導き、またオリンピックゲームスも中止の止むなきに
至つたのである。この消息は我々に一つの大きな暗示を與へる。
それは即ちスポーツの發達は決してローマの職業化まで導い

かもす
こしらへ出す。

準ずる
のつとる。よる。

大眼目
最も大切な點。

表象してゐる
外にそれと明らか
に表してゐる。

てはならぬといふ事、どこまでもギリシャの純眞なアマチュアスポ
ーツの限度を超えてはならぬといふ事である。何事にも氣の早
い日本人は、アマチュアスポーツが完全に建設されないうちに、は
や既にスポーツ職業化の弊風をかもしつゝある。大いに戒むべ
き事と思ふ。

現代のオリンピックは、前にも述べたやうに、一八九四年に再興
されたのであるが、その精神はギリシャ時代のオリンピック精神に
準じた事は言ふまでもない。また四年ごとに一回行はれる事も
同様である。即ちアマチュアスポーツの確立と、フェアプレーに依る
競技の普及と、さうして純眞なスポーツマンシップを通じての國
際親善とが大眼目となつてゐるのである。現にオリンピックのマ
ークとされてゐる五つの輪の連鎖は、よくこの精神を表象して
ゐるのであつて、五つの輪は世界の五大洲を象り、五大洲にある

アジア(亞細亞)
アメリカ(亞米利加)
オーストラリア
(濠太利)

那珂通高

江戸時代末期の儒者。號は梧樓。陸中の人。醫を以て盛岡藩に仕へ、尊玉論を唱へて活躍した。明治十二年(一八七九年)歿、年五十三。

古河

茨城縣猿島郡。

思ひ出でたれば
見せまゐらせん

石部、水口

共に滋賀縣甲賀郡。東海道五十三次のうち。

藤房

藤原藤房。吉野朝の忠臣。

各國民が仲よく手を連ねて行くべき事を示してゐる。また五つの輪にはいろ／＼の色が附いてゐて、アジアは黄、アメリカは青、ヨーロッパは緑、オーストラリアは紅、アフリカは黒といふ意味だとも言はれてゐる。しかも一つ／＼の圓輪は、明朝快活、純眞無垢で、スポーツの精神に相通ずる所があるのである。(學士會月報)

一一 繪畫の感化

那珂通高

下總國の古河驛に、その氏は忘れしが、茂足といふ歌人ありき。その人二十年ばかりの昔、陸奥に來りて物語せし事ありしを、今思ひ出でたれば、書綴りて人々に見せまゐらせん。茂足少き時東海道より京に上る。近江の石部と水口との間に、萬里小路中納言藤房卿の古跡と彫りし碑あるを見た

見たりしかば
ゆかしさに

問ふべくもあらねば

頃しも

休み給はずや

りしかば、その跡のゆかしさに尋ね入りて見るに、觀音寺といふ寺ありて、其所に卿の念じ給ひしといふ觀音を安置せり。

その御佛の御前に、我より先に旅商人と思しき五十餘歳の男入り來りて、何事を歎くにか、さめくと泣きゐたり。うちつけにその故を問ふべくもあらねば立去りてもとの驛路に出でぬ。頃しも如月の初なりければ、日影暖かなる所を見出でて憩ひるたるに、かの男も出で來ぬ。茂足は「日影も暖かなり、ちと休み給はずや」と言ふに、かの男會釋して、同じ所に腰うちかけたり。しばし四方山の物語して、さて後に「先には觀音寺にて見かけまゐらせしが、かの卿に深き御所縁な

おはしますにや
歎せしや見給ひ
けん
いかで……べき

今日しも

語り聞えん

高麗橋
今大阪市東區。

家繼がすべくもあ
らぬさま

東金
千葉縣山武郡。

其所守に頼み
てん

どおはしますにや」と問ふに、いと恥ぢらひたる氣色にて「さては世に似ぬ歎せしや見給ひけん。賤しき身の、いかでやんごとなき御方に所縁などいふ事の候べき。但し、今日しもふと思ひ出でし事ありて涙せきあへざりけるを、恥づかしくも怪しまれ候ひけん。懺悔には罪も滅ぶと承れば、若き時の罪滅しに、途すがら語り聞えん」とて、諸共に立出でぬ。

この男は津の國大阪の人にて、稚かりし時に父母を喪ひ、高麗橋あたりの商人の家に奉公してありけるが、その家の子は遊蕩に耽りて、家繼がすべくもあらぬさまなりしかば、父は怒りて勘當し、れども、母刀自は十人の男子故さすがにいとほしがりき。上總の東金に出店あれば、竊かに其所守

世にまさねば
行きてよ

蕨
埼玉縣北足立郡。

残すくなになり
けり

かたからじ

行きたらんには

る人に頼みてんと思ひ寄りしかど、はるくの旅路を一人遣らんも心もとなくて、この男召出でて「お事は御兩親共に世にまさねば、いづこに住むとも心安からん。後には必ず家分けて得さすべし、暫時が程我が子に具して上總の方に行きてよ」とて、金二十兩程預けられたり。さてその子と共に大阪を出でたれども、若き人の習にて、勘當受けし身のなほ過を悔いもせず、夜ごとに酒を廢めざれば、中山道の蕨驛に來りし頃には、その金も残すくなになりけり。

明日江戸より船出せば、東金に渡らん事もかたからじなど聞くにつけて、行末の事を思ひ續くるに、かゝるたのもしげなき人に具して出店へ行きたらんには、たとひ母刀自の

歸らるまじ

江戸にまさる所や
はある

…ばや

知りなば

すべかりしを後れ
にけり

こを盗みて賣りし
るなさんには

書ありとも、同じむれのえせ者とや思はれん。よし、さは思はれずとも、この人の心なほらぬ程は、大阪にも歸らるまじ。ともかくにも、よしなき人に伴なひて遙かに來りけりと、悔しさ限りなかりしが、また思ふやう、身を立てよすが求めんには、江戸にまさる所やはある。此所まで來しこそ幸なれ、今宵のうち、この人を捨てて歸らばやと思ひ寄りしかど、暫時の程も貯なくてはいかゞはせん。かくと知りなば、預りし金あるうちに、とにもかくにもすべかりしを後れにけりと、また更に悔しがりけるが、この人の脇差は、その父の物好より、百兩餘のつひえもて作りたるものなる事を思ひ出でて、よし、こを盗みて賣りしるなさんには、十日二十日の日

を送るにかたき事はよもあらじと、心一つに謀りすまして、

さらぬさまにもてなしつゝ、今宵限りの旅寝なればなど言ひこしらへて酒勧めて寝させぬ。

夜更けて後にそと起出で、枕邊に忍び寄りてうかゞへば、立てまはしたる屏風の内に、いびきの聲のみ聞えたり。時こそよけれと、徐に屏風に手をかけて引きあくる



松の下の露 (關來觀筆)

に、内より行燈の火影のさと射し出でて、後のふすま障子に映りたるを、人や來ると驚きて顧みれば、今まで見も入れざ

時こそよけれ

ふすま(襖)

人や來る

笠置
京都府相樂郡。木
津川の南岸。
寢させ奉りし形を
なん：ける

あなあさまし

だに……

思ひなりにけん
寝ねたる人

りしそのふすまに、藤房卿の笠置より後醍醐天皇のお供し
て大和の方へ落ち給ふ時、松蔭に袖敷きて、その上に天皇を
寢させ奉りし形をなん描きたりける。この男これを見て、あ
なあさまし、やんごとなき御方だに、君の御爲にはかゝる習
はぬ憂き目をも見給ふものを、いかなれば我は主の物盗ま
んとまで思ひなりにけんと悔しくも口惜しく覺えて、寝ね
たる人の枕邊に額づき、繰返してその過をうち詫びたりき。
かくて東金に到りて後も、憂き事あればこの夜の事を思
ひ出でて、六年、七年過ぎたりしに、その人の心改り、家に歸り
て父の跡を継ぎしかば、我も約束の如く家分けて與へられ
たり。それより次第に仕合よくて、今は家業も子に任せて、あ

なりにたれど

詣でぬれど

御姿を見まゐらせ
ずば

おきて(掟)
おきて侍り

かぬ事なき身にはなりにたれど、さてのみをらんも後めた
さに、をりくはこゝらあたりまで物あきなひに參るなり。
されば何時とてもこの寺には詣でぬれど、今日しもふと思
ひ出でければ、若しそのをりしもこの卿の御姿を見まゐら
せずば、いかでかく事なくて世にはあり經べきと、忝さに涙
はふり落ちて、君にも怪しまれ候ひぬ。我は賤しき生れなが
ら、若き時より軍物語の書讀む事を好みければ、その時しも
この事を思ひ出でて、まさなき心を改めぬ、よりて子供等に
ももの讀む事は常に厳しくおきて侍りと語りぬとぞ。茂足
はその頃四十歳ばかりの人なりき。

(洋々社談)

東慶禪寺
臨濟宗。今は圓覺
寺に屬する。

北條時宗
北條氏第六代の執
權。

北條貞時
同第七代の執權。

鎌倉殿

北條貞時

女の事にて候へば

これある事

一二 同情

弱者たる女子に同情した著しい例は、鎌倉松が岡の東慶禪寺に於て見る事が出来る。寺はもと僧寺であつたのを、頼朝の叔母が尼となつて此所に住し、それから尼寺となつた。中興の祖は北條時宗の夫人で、即ち北條貞時の母である。覺山といふのがこの人で、

鎌倉殿に覺山願ひ候は、出家の身ながら女の事にて候へば、利益の種も御座なく、それに就き、女と申すものは、不法の夫にも身を任せ候事尋常に候へども、女の狭き心にては、ふと邪の思立にて、自殺など致し候者これある事に候

縁切り候うて

相願ひ候

救はう。

弱者たる女子

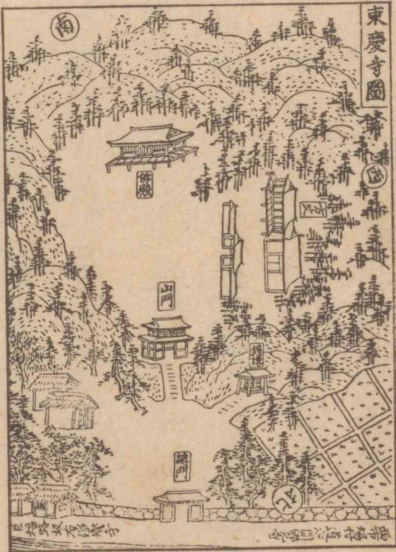
夫と不和に...といふやうなふらちな者

ふらち(不埒)

間三箇年のうち當寺に相抱へ、何卒縁切り候うて身輕に成し候寺法相願ひ候由、これにより貞時より天聽を經られ、その意に任せられ候。

と寺記にある通り、夫に虐待された婦人を救はうといふのが本願である。それより五世の用堂尊尼は後醍醐天皇の女、第二十世の天秀禪尼は豊臣秀頼の女で、即ち徳川秀忠の孫であつた。この寺は男子禁制で、女が逃げて此所にはいれば、何ともする事が出来ない。つまり弱者たる女子を保護するといふ目的で成立つてをつたのである。夫と不和になつて直ちにこの寺へ逃げこんで、二三年経つてまた他へ縁附くといふやうな、ふらちな者の隠場所となつた悪例もないで

はないが、これは一面の弊害で、止むを得ない。たよりのない
女人の爲にかういふ寺のあつたといふ事が、いかにも面白
く思はれるのである。



東慶寺圖
(志倉謙編新版享貞)

針の折れたのを
形をいたはる意味もある。二月八日及び十二月八日の兩日
には女子の針供養といふ事をする。針の折れたのを集めて、

くやしくば尋ね來
て見よ松が岡
など川柳に歌つたのは、
即ちこの寺である。

女子には特に同情が
大切である。雛祭には人

淡島の社に納め、一日絲針の業を休むのである。裁縫の業は
女子の平生の仕事であるから、毎日々々使用した針に對し
て、感謝の意を表す心持だらうと思ふ。かういふ無生物に對
しての供養はまことに優しい心掛である。

如月きさきや若き心の針供養

正月元日にははうきを使はぬ。一年中一日として休まな
いから、この日だけは休ませるといふのも、はうきに對して
の同情である。この心を以て召使や奉公人に對しなければ
ならぬ。またこれは無生物ではないが、初午の日、摩耶マヤ參に馬
を引いて參詣して、飼馬の無難を祈るといふのも優しい風
習と思ふ。

如月きさきや云々
下總の俳人長翠の
句として

對しなければなら
ぬ

摩耶
兵庫縣武庫郡白畑
原の山上にある

お鶴 傾城阿波鳴門のお鶴、幼時寶劍の所を、探す爲に國を出た、その母を慕つて、廻國してお鶴が巡禮を、お鶴が殺すといふ、筋が

観音の三十三番の札所廻り、六十六部のうち連れて行くのは、何となくあはれな、詩的な感じを起させるものである。これは淨瑠璃のお鶴よりの聯想からではなくして淨瑠璃がこれを材料にしたので、即ち人々のこの感情を利用したのである。御詠歌のあはれな調子につれて野山に行暮れて旅するのは、人の情をたよりとするのである。これ等の人々の境遇には、



(筆葉玉原栗) 鶴 お

いろく、あはれな物語が疊まれてあるかと思へば、そこばくの報謝を興へるのも、決して惜しくはない。

田舎を旅行して、所々の門戸に、十年間諸事儉約。物もらひ入事無用。などと張出してあるのを見ると、何となく厭な感じを起す。諸事儉約はもとより結構である。しかし、人の情にすがつて旅するあはれな巡禮者などに向つて、些細な報謝が施されないであらうか。儉約してといふ聲のもとに、慈善といふ同情の心が塞がれてしまふのは、餘りに現金な世の中と思ふ。謠曲の室町時代のやうに、行暮れた旅僧に一夜の宿を貸すといふ接待まではなくとも、せめてあはれな物乞に少々の志を出すくらゐな情はあつてもよいではあるま

些細な報謝が施されないであらうか

せめて……あつてもよい

さても……懐かし
さよ

いか。

さても昔の世の懐かしさよ。

歌人にして

必ずしも遜色あり
と言ふべからず

一三 太田垣蓮月尼

蓮月尼は近世の有名なる歌人にして、これを平安朝に輩
出せし幾多の才女に比するも、その詩才に於て必ずしも遜
色ありと言ふべからず。況やその一生涯は數奇に富みて、面
白き節あるに於てをや。

尼は寛政三年に生れ、幼名をお誠といふ。父は傳右衛門光
古とて、京都知恩院の廣間侍なり。お誠は天性伶俐にして、最
も和歌を善くし、且文章も人にすぐれ、筆蹟さへも麗しかり

況や……於てをや

寛政三年
第一百九代光格天
皇の御代。二四五
一年。

知恩院
京都市東山区華頂
山の西麓。淨土宗
鎮西派の總本山。

達せしかば

しかば兩親の寵愛一方ならざりしが、その母はお誠の幼き
頃世を去りぬ。

貞淑なりしかば

かくて月移り歳逝きて、お誠は妙齡に達せしかば、江州彦
根の近藤何某を迎へて婿となせり。親に仕へて至孝なるお
誠は、夫に對しても、また貞淑なりしかば、父子、夫婦の間頗る
圓滿なりき。とかくするうちに、傳右衛門は初孫を抱きて、年
來の憂を忘るゝ身となり、かくて夫婦の間には、四人まで子
を擧げたりしに、いかなる宿世の業かありけん、四人の子は
いづれも夭折せり。一家の悲歎言ふべくもあらず、加ふるに
お誠三十三歳の厄年といふに、その夫また病にかゝりて歿
せり。四人の子を先立てたるだにあるに、その夫にさへ後れ

擧げたりしに

言ふべくもあらず

……だにあるに……
……さへ

ためらふべくはあらねど
老先短き父の...
落膽もやせん

思ひ捨てつ

すぐれたるより

こぼち去りぬ

しかば、お誠はいたく浮世の無常を感じ、あたら緑の黒髪を切捨てて法名をば蓮月と呼べり。もとより世をはかなみし身なれば頭を圓むるにつゆためらふべくはあらねど、かくては老先短き父のいかばかり落膽もやせんと、殊更髪を剃落さずして、たゞ切下となし、且法衣をも身には著けざりしかど、心のみは眞實の尼法師となりて、深くく人をも世をも思ひ捨てつ。

されど周圍の人は蓮月を捨てざりき。即ちその容色の極めてすぐれたるより、或は再婚を勧むる者あり、或は入夫を申しこむ者ありて、その煩はしさに堪へざりければ蓮月は秤の錘もて、我と我が前齒をば悉くこぼち去りぬ。この恐し

決心と...節操と

泣きくらしつゝ

さまをば變へつ

もとより貧しき身の...

きふるまひによりて、尼の強き決心と堅き節操との知られければ、これより後は、絶えてさる事言ふ者なきに至れり。

かくて蓮月四十歳の頃、その父身まかりぬ。

たらちねの親のこひしきあまりには

墓に音をのみ泣きくらしつゝ

といふ歌はこの時詠みけるなり。

父の存命せるばかりに尼姿とならずありけるが、今はその父も世を去りければ、こゝに始めて純然たる圓頂緇衣の沙門とさまをば變へつ。

もとより貧しき身の、尼となりてひたすら佛に仕ふるのみを許さざれば、蓮月はなりはひのたづきにとて、陶器を製

ひさぎ(鸛)
ひさぎしに

岡崎
今京都市左京區。

詠せるもの

造する術を覚え、それに自作の和歌を焼附けてひさぎしに、いたく世人の愛づるところとなりて「蓮月焼」の名忽ち世に高まりぬ。この頃は岡崎に住みければ、その歌にもこのわたりの景色を詠せるもの多し。

冬畑の大根の莖に霜さえて

あさ戸出さむし岡崎の里

弘まるにつれて

都ばかりにはあらで、蓮月の名の諸國に弘まるにつれて、弟子入りを志願する人の多かりけれども蓮月は、敷島の道には、定家以前には師匠取りといふ事はなかりき。たゞ古歌の心を以て師とせられよ。とて、これを辭みけり。されどなほうるさく申しこむ者の絶えざりければ、彼方へ移り此方へ

定家
藤原定家。鎌倉時代初期の歌人。仁治二年(一九〇一年)歿、年八十。

住まざりけり

引越し同じ所に二歳とは住まざりけり。よりて誰言ふともなく、屋越の蓮月とあだ名するに至りぬ。

浮雲のそこにこゝにとたゞよふは

きえせぬまでのすさびなりけり

よあらしのつら
さのはては雪と
なりておきてほ
たゞくふゆのや
まさと
蓮月

西賀茂
今京都市上京區。



蓮月尼筆蹟

と詠ぜしはこの時なりけり。而して最後に浴外西賀茂なる神光院の境内に庵を結びて、移り住みぬ。

露の身をたゞかりそめにおかんとて

くさひきむすぶ山のしたかげ

明治八年
二五三五年。

かくて明治八年二月八日、八十五歳を一期として、大往生
を遂げぬ。

願はくは後のはちすの花の上に

くもらぬ月を見るよしもがな

これその辭世なり。家集を「海女の刈藻」といふ。

蓮月尼の一生は、人倫の際遇に於て極めて不幸なりき。されどその貞操の正しく、道心の堅かりしは、後の世の婦女子の鑑とすべく、殊にその和歌に至りては、得易からざる天才として、永へに欽仰すべきなり。

(田中嘉三郎の文に據る)

貞操の正しく、道心の堅かりしは、

佐佐木信綱

國文學者、歌人。文學博士。明治五年三重縣に生れた。御母上様

一四 人の新盆に

佐佐木信綱

御母上様御逝去あそばされ候は、未だ櫻の花咲きそめぬ頃にて候ひしを、御遺愛のとして御墓近う植ゑ給ひしそのひともと、若葉の緑一入色添ひて、夏も深くなり候。何くれと御思出もしげくおはしまし候らんと、先日御墓詣して歸り來てより、殊に日々御わたり思ひ上げ居り候。さて七月も十日を過ぎて、盆も近くなり候。まことに人なきあとのせめてもの心やりは、佛事の營にて候を、殊にお別れなされてより月も未だ淺き御母上の御事なれば、その夜門に焚き給はん御迎火のひまにも、亡き御面影更に新たに思ひ浮べ給ふべく、御佛事の營に

御思出もしげくおはしまし候らん

佛事の營にて候を

思ひ浮べ給ふべく

御手傳せさせ給ひ
し御祭にておはすべ
からん

つけても、御健やかにて、共に御手傳せさせ給ひし去年
をしのび給ふべく、とりくあはれ深き御祭にておは
すべからん。さてこの品輕少なから御母君御生前御好
物の物と覺え居り候まゝ御手向にとさし上げ候。いづ
れ近きに伺ひよろづ御まのあたりにてと。かしこ。

(文のしをり)

埴原久和代
洋畫家。名は桑喜
代。山梨縣の人。
昭和十一年歿。年
五十八。

一五 魂祭の頃

埴原久和代

夏になると、とかく海濱を想ひ、山嶽にあこがれる。しかし
旅行と言へば、同時に汽車の雜沓、馴れぬ宿屋の混雜、さまざま
まな旅行用具を整へる煩はしさ、そんな事を思ふと、到底涼

明ける と 朝
風が 散らす

味どころではなくて、寧ろ一層の暑苦しさをさへ感じて來
る。夏は何と言つても清楚な家にて、靜かに心の向くまゝ
の生活が一番涼しいやうに思へる。

曉早く雨戸を明けると、涼しくそよぐ朝風が、軒端に近い
木の葉の露をはらくと散らす。暮行く街に「とうふい」の聲
も決して暑い感じのものではない。晴渡る夜空にきらめく
星の光には、永遠の涼味をさへ思はせられる。木の葉をまれ
る青い月光。燈火は消して、縁近く蚊遣の煙のゆるく漂ふう
ちにさまざまの思出、それはともすれば故郷の夏に走る。し
かもずつと以前、田舎に住んでゐた子供の頃の事が多い。
山の緑は日に濃くなつて、森の茂みの奥の方に杜鵑

それ は ともす
れば 走る

大ひら山
山梨縣巨摩郡。

の鳴く頃になると、田圃には再び秋が來たかのやうに、時ならぬ黄金色の麥が刈干される。その麥稈で子供たちが螢籠を造つて遊ぶ時分は、もうほんたうの夏になつて、苗代小田に鳴く蛙の聲にも、夕暮などは殊に涼しさが含まれる。夕月が山の端に隠れて、眼の前にそゝり立つ大ひら山が眞暗くなる。村の子供たちはつれ立つて山裾の方へ螢狩に出て行く。薄い木で造つた輪に、兩方から麻布を張つた籠の中には、涼しい匂のみづくした螢草が入れられる。

眞夏の夜の息とでもいふやうな、すういと光つては消え、消えてはまたすういと光るあの凄凉な光を追うて、子供たちは「ほーたるこーいこい、やまぶしーこーいこい」と、一種

聴きほれでも
するやうにも

の哀調をおびた節をつけて、徐かに螢を呼んで行く、その調子は、どうしてもしつとりとした田舎の夜の情景でなくてはならぬ。それは寂しい詩味を持つ。そして子供たちは、自分の聲が近くの山に響くその山彦に聴きほれでもするやうに、じつと間を置いてみては、またしんみりと呼んで行く。ふと川べりに一つ見附けた光を、駈寄つてそうつとつかむと、それは螢ではなくて、白い野茨の花の露に、星の光の宿つたのだつたりする。

螢の季節が過ぎ、あわたゞしい養蠶が片附いてしまふと、やがて代田が作られ、降る日にも照る日にも、白い菅笠の少女たちの手ぶりも面白い田植、田の草取が續く。

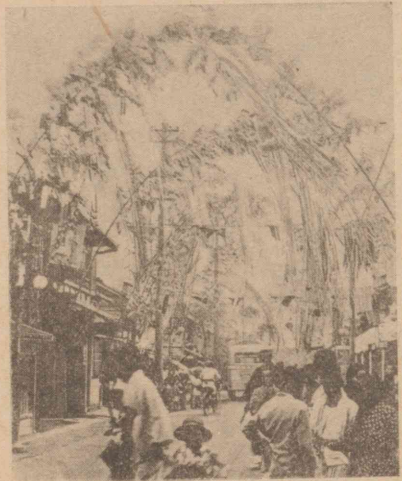
風を
入
れ
た
頃
だ
も
た

さうして長い五月雨が漸く晴上る時分は、さすがにこのあたりにも眞夏らしい暑さが来る。土用干、蟲干などといって、藏から古臭い匂のする書畫書類などを取出して、座敷に掛並べて風を入れたりするものもこの頃だつた。遠い昔からの祖父母たちが遺し、くして來た物を、心靜かに繰擴げては昔の事などさまざまに想像してみる。それは言ひがたく懐かしいものだつた。

七夕の星祭もまたわたしには優しい楽しい行事だつた。五つの色の紙に、父も母も子供たちと一緒になつて、心に浮ぶまゝを書附けては、笹の葉末に結び附けて庭に立てる。どのお星様が牽牛星セレンで、それからどれが織女星アタラシキヒメかと母に尋ね

ゆてる(茹)

聞かされて



夕 七

たり、星祭の爲にこの宵庭にこしらへたかまどでゆでた豆の枝を、床の間の牽牛織女の繪の前に供へながら、子供らしい星のロマンスを想像して見たり、この夜の笹の露を頭にうけると、大きくなつて上手な歌よみになると聞かされて、夜更けるまで笹の葉に露の結ぶのを待つたりした

事などもあつた。

この星祭に次いで、盂蘭盆に迎火を焚く夜の事も、またその頃のよい追憶でなければならぬ。清淨に飾られた佛壇に

も、その夜からは常よりあか〜と燈明が點され、玄關には大きな定紋の附いた繪模様の古風な燈籠が掛けられる。たそがれ過ぎる頃から、衣服を改め、母につれられて、門外の小さな流のほとりに積まれた苧殻アサギを焚く。苧殻が盛んに燃上ると、その焰が水に映じて、恰も焚火が流れるやうにも見えた。あれ、あのかゞり火でお精靈様がござらつしやる。それ、あの一番大きく高く上つた火花が、お坊様方のお先祖様、南無と、爺やは珠數をつまぐる。あの火花が一番偉かつたお祖父様と私が言へば、弟は「いや、あれは一番りつばだつたお祖母様よ。」などと、御靈といつても迎へるのだと思ふと、何かなしに賑やかな感がするのだつた。

かゞり(篝)

けやき(樺)

受け、ないで
は、あつた
な

迎火を焚終ると、母はその火を線香に移して、裏庭の先祖の墓に參る。子供等も母のする通りに拜んで、つゝましく墓前をさがると、をりからの月は、皎々と澄渡つて、涼しい光は何となくもう初秋を思はせるやうな事もあつた。その月光の下、墓前の古い大けやきの根がたに佇んで、母はきまつて三人の子供に暫く祖先の話をして聞かせる。それが毎年同じやうな話でありながら、聞いたたびにまた新しい感動を受けないではゐられなかつた。それがすむと、縁側の古風な燈籠の薄明りの下に、この時は父も加つて、しんみりと盂蘭盆らしい話に夜を更かす。遠くの方から村の若衆が盆踊でも始めるらしく、何とはないざわめきも聞えて來る。

山本一清
天文學者。理學博
士。明治二十二年
滋賀縣に生れた。

洋々たる
ひろくしたさま。

神祕
不可思議で、はか
り知れないこと。

運行
めぐりまはつて進
行すること。

自傳文

天の河

山本一清

天の河は、月の明るい夜には全く消えてしまふやうな薄い光の帯であります。月のない夜には、その眞の壯大さが十分に表れます。その幅の或は狭く、或は廣く、光の程度も濃淡さまざまで、長く南北に續く有様は、全く洋々たる大河の流を見るやうです。燦爛たる星のまた、きも、さながら漣さざなみのやうに思はれます。

あゝ、神祕な天の河。何故にこの不可思議なものが天に横たはるのか。これは實に昔からいづれの國人もが抱く、一つの深い疑問でありました。機械力のない昔の人は、この雄大なる河筋がすべての星と同じ歩調で、晝夜、四季の運行をするといふ事實を知つただけで、その本體を見破る事は到底出来ませんでした。

開拓者
新たにはじめた人。
ガリレオ
イタリーの天文學
者。(西紀一五六四
—一六四二年)

ハーシェル
イギリスの天文學
者。物理學者。(西
紀一七三三—一八
二二年)

宇宙
天地四方。

十七世紀の初、新學の開拓者として、世界を驚倒させた偉人がガリレオは望遠鏡を用ひて、始めてこの千古の謎を解いたのでした。ガリレオが用ひた望遠鏡は、今から見れば眞に憐れなものでありましたが、それでも天の河は一つ一つの微星の密集團である事が疑なく認められました。おゝ、あの壯大な光帯が、全く微小な星の集合であらうとは――

ガリレオ以來今日まで、天文家は繰返し、天の河を観察しました。その中でウイリアム・ハーシェルが最も偉大なる效を挙げました。ウイリアムは、天の星の數を數へ盡して、始めて天のすべての星數が、天の河へ近附けば近附く程増加し、その極端に増したものが天の河そのものであるといふ事を知つたのであります。然らば、星は何故に天の河に向つて集中してゐるのでせうか。ウイリアムの説によれば、吾人の知つてゐるこの大宇宙は、幾千

太陽系
太陽とこれを中心
として運行する諸
星を合せた稱。

萬といふ星の集合團體で、その集合の形は、ほぼ平板上に擴がつた物と考ふべきである。そして我が太陽系は、全體のおよそ中心に位置を占めてゐる事になつてゐる。この平板上に集つた全體の形を、輿行の長い方に深く透視したものが、我々からは天の河と見えるのであらうといふ事です。ウイリアム以後今日まで、多くの學者は繰返し天の河とその中にある星の並び方を研究しましたが、やはり大體の觀念は、今もウイリアムの考と變りません。

夏の夜空を眺めながら、古い昔の天文の事を考へ、また遠い宇宙の果を思ひ浮べながら、天の河を見るのも人間ばなれのした面白いものであります。天の河を見るのに、澄切つた夜の肉眼の眺も壯大な感じであります。雙眼鏡のある方は、それで以て天の河のあちらこちらを御覽になりますと、星の集り方の多少や、輝き、濃淡の區別なども一層はつきりとして、それだけ宇宙そのものに接近したやうな、雄大な自然界に新しい友だちを得たやうな、喜ばしい心持になります。

一六 幸福

栗原古城

私たちの生活が幸福であるか不幸であるかといふ事に就いては、外界の事情よりも、私たち自身の心の持ち方であるといふ事は、古來幾多の賢人の説いてゐるところであります。この事は、餘程心を静め氣を落著けて、外部の喧噪から遠ざかり、孤獨になつて沈思してみないとわからない事であり、若い世馴れない人たちは、ともすれば、何

栗原古城
翻譯家、名は元吉
實踐女子專門學校
教授。明治十五年
埼玉縣に生れた。

：事は：とこ
るであります
この事は：事
であります
若い世馴れない人
たちは：考へて
ゐるやうでありま
す

間違でして

彼は：呼びかけたりする

不幸といふものは：誘惑するか：乗りこんで来るものであります

か積極的の仕合といふものが、華やかな衣裳を著け、賑やかな音楽を先立てて、堂々と表面から乗りこんででも来るか、或はまた、自分が非常な苦しみをしたり、無理な危険を冒したりして、これを探し求めなければ、得られないもののやうに考へてゐるやうであります。けれども、それは大變な間違でして、幸福は私たちの氣附かぬうちに、裏口からこつそりとはいつて来て、私たちの足許に黙つて坐つてゐるのです。ですから、私たちの方でこれに氣附かなければ、彼は何時まで經つても、先方から聲をかけて、私たちに名のりをかけたり、呼びかけたりする事はないのであります。これに反して、幸福の反對である不幸といふものは、美し

幸福は：……ものであります

い彩雲を浮かべたり、虹の橋を架けたり、若しくは華やかな粧をして、笛太鼓の賑やかな音色で私たちに誘惑するか、さもなくば、恐しい騒を先立てて、堂々と強制的に玄關から乗りこんで来るものであります。それで、私たちが一度その捕虜となつてしまふと、たとひどんなにそれが小さな事であらうとも、その苦痛は私たちの心の全體を占領して、今まで自分の占め得た幸福は、まるで帳消にされてしまふものであります。極めてわかり易い適切な例を申しますと、私たちは健康といふ何ものにも換へがたい大きな幸福をもつてゐますが、この無上の幸福の状態は何かと申せば、それは苦痛がないといふ事だけにとゞまり、幸福の中に包まれてゐ

私たちは……悟る
のです

る人間は、自分自らはその幸福を意識せず、健康そのものも「自分はお前に幸福をもたらして来たのだぞ」とは言つてくれません。それで私たちは病氣にかゝつて、健康を失つた時に、始めて過去を振り返つて、健康の貴い事を悟るのです。

ところが、病氣はどうでせう。この方はすぐに私たちの意識を囚へて、その苦痛に執著させます。彼はなかく執拗で、決して私たちを自由にしてはくれません。それでさんく私たちを責めさいなみますから、若しも私たちの意志が弱いと、そのちよつとした不幸や、苦痛の爲に、従来私たちの所有してゐた全部の幸福までも自分から投出してしまつて、進んで没落の淵に身を投ずるやうな事になります。

自分の心が……ざ
わつてゐたりす
る

ところが、私たちは實際どうかと申しますと、自分の心が頑固であつたり、不従順であつたり、または遠くの方ばかり見詰めてゐたり、驚き、易くざわついてゐたりする等の事情から、心の眼がまるで盲目になつてゐる爲に、苦痛の假面を粧うて来る快樂を取逃したり、眼前に坐つてゐる幸福を少しもそれと氣附かずに、不幸や禍の跡のみを追駈けてゐたりして、普通に行けば樂に行ける一生を、わざく苦しみに通しに終る事が多いのです。

粧うて

人物は……人た
ち

小説や戯曲の中に現れる人物は、多くはこのやうな、心の眼のあいてゐない憐れな人たちで、彼等は思ひ過しをしたり、心配をし過ぎたり、餘計な盲動をしたりして、わざく苦

ところは……田な
いのであります

痛や艱難の中に陥り、もう取返しのかかぬといふ瀬戸際になつて周章狼狽するやうであります。これ等の事がらには、多少の誇大はあるとしても、私たちの日常やつてゐるところは、大抵皆この範圍を出ないのであります。殊に近代文明といふものは、私たちの外界を濫りに賑はしく、騒がしく、複雑にするので、私たちはやたらに慾望を刺戟されるだけで、心はいやが上にも動搖して、とても沈思したり、反省したりする餘裕がなくなつて、心の眼は漸次閉ぢられて行くばかりであります。この事は、近代文明の一番恐しい點で、私たちが始終注意して、警戒してゐないと、とんでもない間違つた議論や、學說や禍などが、新しい華やかな假面を被つて、誘

閉ぢられて

この事は……點で

惑しに來るものであります。

ですから、この世の中には、誠意から生じた間違といふものが數限りなく充満してゐて、心の盲目な私たちは、何時もその捕虜となつては苦しみぬくのです。私たちが自分から善い事と信じ、確かに眞理だと思つてした事が、神の眼から見て恐しい悪事であつたり、間違だらけな事であつたりするものは、殆ど日常の事だと申して差支ありません。けれども、かういふ不幸を味はつてこそ、幸福も始めてその眞の輝を放つので、さもない時には、人は幸福をたゞ一通りの尋常な事として、一向感謝する事もなく、大部分は無意識のうちに過してしまふ事でせう。

私たちは……苦し
みぬくのです

幸福といふものも
過ぎぬ

恐しいのは……追
駈ける事です

要するに、私たちの生命が宿つてゐるこの人生といふものが、消極と積極とのかね合ひで出来てをり、二つの相反對した力の調和の上に私たちの肉體も保つて行けるのであり、私たちの幸福といふものも、畢竟はその適度な快い調和に過ぎぬといふ事を知つてゐないと、とんでもない不幸の渦中に巻きこまれるのであります。分けて恐しいのは、實際ありもせぬ空想の彩雲に惑はされて、現在の苦痛のない境涯を捨てて、新奇なものゝ跡を追駈ける事です。現在の世態は益、この危険の前に若い人たちを暴露するやうになつて來ました。これによく氣を附けねばなりません。

橘曙覽

江戸時代末期の歌人。志濃夫廼舎と號した。越前の人。明治元年（一八六八年）歿、年五十二。

咲ける

一七 たのしみは

橘 曙 覽

たのしみは妻子睦まじくうち集ひ

かしらならべてものを食ふ時

たのしみは朝起出でてきのふまで

なかりし花の咲ける見る時

たのしみは常に見馴れぬ鳥の來て

軒とほからぬ樹に鳴きし時

たのしみは物識人に稀にあひて

いにしへ今をかたり合ふ時

たのしみはそゞろ讀行く書のうちに
われとひとしき人を見し時

たのしみは三人の兒どもすくく〜と
おほきくなれる姿見る時

たのしみは稀に魚煮て子らみなが
うまし〜といひてくふ時

たのしみは家内五つたり五つたりが
風だにひかでありあへる時

だに
ありあへる時

たのしみは神の御國の民として
神のをしへを深くおもふ時

(橋曙覽全集)

一八 親の慈愛

柳澤 洪園

一 親の慈愛

余はいとけなき頃より詩歌の道を好み、偶々作文などせし
をりから、稿なりて父に見するに、一つとしてほめられたる
事なく、たゞ「無益の事なり」とて座右に投捨て置かれ、他の者
のは見てほめ給へば、さりとはいかゞとのみ思ひ過し、
が、後に妻に迎へたる女の、もの縫ふ事の人にすぐれて、小袖
など一日に一襲づつ縫ひて、餘事までも事缺かねば、もの縫

柳澤洪園
江戸時代中期の儒
者。大和郡山藩の
重臣。名は里恭の
實曆八年(二四一
三年)歿、年五十

ほめ給へば
思ひ過しゝが

ふ職人の見ては驚くばかりに上手なりけり。余或時もの縫ふをひたぶるに愛で賞しけるをり、妻の言ふ、「三歳にして母に後れ、繼母に育てられしが、いと厳しき性質にて、五六歳より水仕の業をつとめ、七歳より手習物讀、裁縫を教へられ、實の子ならねば、教訓足らじと末に至りて、そしられんは口惜し。」とて、羽根つく遊だにえせで、たゞもの縫ふ事などのみに違なかりつれば、をりからははげしき母よと思ひしかども、今となりてはもの縫ふ事を人にほめらるゝは、ひとへに繼母のなさけ薄からざる慈愛なり。」と言へるを聞きて、余がいとけなき頃の作文をほめられざりし事の、いとありがたきを思ひ合せぬ。

子ならねば

羽根つく遊だにえせで……

違なかりつれば

二 朝 顔

思ひ知らる

朝顔を植ゑたる日より芽ざすを待つは、子を育つる親の心もかくやとばかり思ひ知らる。

たのめて

道にまどへる者
繪にも巧めるもの
をや

二葉よりいや葉生ひ出で、いと細やかなる蔓のかきほに取著くさまは、いはけなき兒のものをたのめて立ち初むるに似たり。蔓稍肥え葉いよゝ茂りて、この蔓かの蔓にそひ、かの蔓この蔓を巻きて争ふが如く、競ふが如きは、道にまどへる者を案内するさまあり。或は登らんとする者の手をとりに引上ぐるさまなど、繪にも巧めるものをや。

花はその日々に色變へて、おのがじしに染めなして、夙に起くるを勸むるに異ならず。東雲の今日明けゆく程、露を

露を含みたるが
しづくももらさる
る……

營みなば

なぐさみ侍りぬ

ふご(菴)

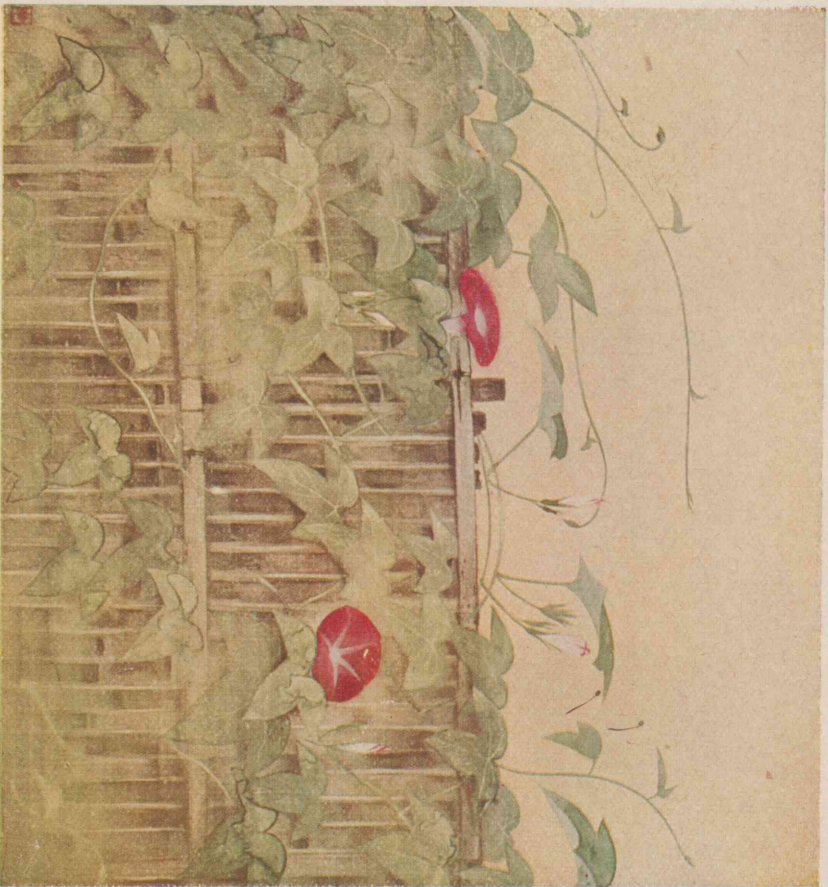
……とぞ

含みたるがそよ吹く風にもまれて、重げに置きあへずふり
こぼせば、此方の花の、その露を受けてしづくももらさる、
すべて君臣相いつくしみ、父子相隣み、夫婦相睦び、兄弟相助
け、朋友相親しむにひとし。

人の世にあるもこの花の如く、その日くを營みなば、盛
りもいと長く久しからめと、まだきに起出で、東雲の曙をな
ぐさみ侍りぬ。

三 世渡る業

木曾の山中など、深山幽谷にて岩茸を採るには、ふごとい
ふ物を造りて、繩を附けて、夫はそれに入りて、その妻樹々の
枝より下げて、釣りおろし引上げなどして、谷間をあさると



朝 綱 三石紅掛筆

過ちて…落ちた
らんには命なかる
べし

あはび(鮑、鯨)

得まく思へど

起りぬべし

ぞ。

下は幾丈とも限り知れざる所なる由見し人物語り。若し過ちて綱の切れて落ちたらんには命なかるべし。

また伊勢の海にて海士のあはび採るには、乳呑兒など引連れて、夫はかいを使ひゐて舟もやひするに、妻は海底に飛入り、此所彼所貝をもとむるうちに、兒の乳を尋ねてよゝと泣く聲の水底に聞ゆるにぞ、今一つ得まく思へど、兒の泣く聲の聞ゆるにひかされ、浮び出でて舟べりに取付き、息もつきあへず兒に乳を添ふる有様、あはれにして實に惻隱の心も起りぬべし。

世渡る業さまざまなる中にかゝるすぎはひするやから

あるものを
過しつる身

もあるものを、家にありてその日を樂に過しつる身は、いと
ありがたき事にあらずや。

四 土器賣る翁

伏見
今京都市伏見區。

伏見より年七十歳ばかりなる老翁、土偶人、土器のたぐひ



洪園筆蹟

賣りありくあり

を擔ひて、洛中を賣りありくあり。常に商ふ家に来りて食事を
するをりから、その家の奉公人大勢集り、かの翁に言ひけ
るは、「御身の擔ひたるものは、その價いか程ばかりの品にか。」

…荷なるべし

過ちて碎くまじき
ものにもあらず

と問へば、翁答へて、「銀十五六匁程の荷なるべし。」と言ふ。また

言ふべからず

商ふなれば

問ふ、「京の町は人のゆきかひ繁き所にて、若し過ちて皆碎く
まじきものにもあらず。さやうの時はいかゞする。」と言へば、

「それこそ過なれば、さる事なしとは言ふべからず。さあらん
時はその事をありのまゝに陳べて、我等も年久しく商ふな
れば、一荷くらゐは情にて借受けて商ひ申すなり。」と言ふ。ま
た問ふ、「その上にもまた碎くまじきものにもあらず。その時
はまたいかゞする。」となじり言へば、「いかに問屋なりとて、數
度の無心も言ひがたければ、そのをりこそその許たちの如
く、奉公なりともいたすより外にせんかたなし。」と言へり。

(雲萍雜志)

小笠原長生
子爵。海軍中將。
宮中顧問官。慶應
三年(一五二七年)生。

東郷元帥
東郷平八郎。海軍
大將。元帥。侯爵。
鹿兒島縣の人。昭
和九年歿。年八十
八。

まことや

忝うした

知らねばならない

一九 東郷元帥とその母その一 小笠原長生
赫々たる大勳績と神の如き大人格とを久遠の青史に輝
かせる東郷元帥は、昭和九年五月三十日午前七時廣大無邊
なる聖恩と、全國民の涙ながらの祈願との中に永へに現世
を去られた。

まことや精忠の權化であり、國家の至寶であつた東郷元
帥の偉大さは、今更言ふまでもない事であるが、親炙實に四
十年、朝夕恩寵を忝うした私としては、元帥の高徳をしのぶ
にあたり、今更感慨深いものがある。

東郷元帥を知るには、まづその母堂を知らねばならない。

「平八どん、御奉公を大切にな。」

この一言を遺言として、明治三十四年二月十日の曉天、梅
花香ばしい一室に愛兒愛孫たちに取繞まれて、眠るが如く
逝いた元帥母堂益子刀自が九十年の生涯は、尊くもゆかし
いものであつた。

古今の歴史や史傳を繙いて見ると、偉人と賢母との關係
を證據だてる事蹟が澤山にあるが、中でも東郷元帥と益子
刀自くらゐこの色彩の鮮明なのは稀であつて、刀自の爲人
や言行を知つたなら、誰でもこの名婦の子に凡庸者が出來
ようはずはないと肯かれるであらう。

刀自は薩摩藩士堀與三左衛門の三女で、二十歳の時同藩

明治三十四年
二五六年

逝いた
刀自が九十年の生
涯は

刀自くらゐ...鮮
明なのは

出來ようはず

鶴々たる

の士東郷吉左衛門實友に嫁した。まだうら若い身で嫁いだ刀自が覺悟の基礎となしたのは、眞心の二字であつて、これを唯一のお守として、何から何までまめしく立働いたので、一家はまことに和氣霽々たるものであつた。

文武二道に達した上、正廉を以て鳴つてゐた實友は、やがて名君齊彬侯の知るところとなり、郡奉行、高奉行、御納戸奉行等の要職に擧げられ、一意公務に盡瘁し、家にある事さへ稀だつたので、家事は一切刀自に委せてゐた。随つて刀自は責任の重きを知り、誤なかれと願ふの餘り、堅い信仰を持つやうになつたのである。

刀自は子福者で、四十一歳までに五男一女を擧げたが、三

齊彬
鳥津齊彬。藩摩藩主。安政五年（一八二五）歿、年五十。
家にある事さへ

誤なかれ

仲五郎實良こそ

十六歳の時儲けた四男仲五郎實良こそ、後の東郷元帥その人である。

何とかして愛兒を品性の高潔な人間に育てあげたいものと、日夜心を砕いた刀自の苦心と努力とは並大抵のものではなかつた。例へば、愛兒たちが臥てゐる時、用事あつてその室を通られる際でも、決して頭の方は歩かず、わざ／＼その足先を廻つて通る程であつた。

「この子供たちは、將來有爲の人物になる者だ。たとひ親でもその頭上を踏むやうな事は、自然彼等を輕蔑する事になり、延いては彼等に自屈の念をも起させる事になるから、必ず慎まねばならぬ。」

たとひ親でも

……をして……しめる

と、家人等を戒めると共に、愛兒たちをして自重の念を起さしめる事に努めたのである。

この賢母にはぐくまれて、仲五郎はすこやかに生ひ立つて行つた。天性敏捷な仲五郎は、その智慧の發達にも恐しい程の閃きを見せた。元帥が十歳の時、彼は自分の敏捷を試す爲に、或日、田圃の中を流れる水際に立つて、小刀を揮つて、「えいつ」と小鮒の群に切下しく、また、くうちに數十匹を切つて得意満面だつた。この事を隣人から聞いた刀自は、元帥を膝下に呼附けて、容を正し、

「武士は大敵を破つてこそ譽になれ、小魚を切つた事など何の自慢になる。」

破つてこそ……なれ
何の自慢になる

こそ……あつたが

とたしなめた。得意の鼻を折られた少年は、その時こそ不平満々であつたが、母の道理ある諭には反抗も出來ず、漸く自省し、行を改めたといふ。

ところが、この賢母が十歳の仲五郎にあやまつたといふ話がある。或日の事、戸棚に氷砂糖のあるのを見出した仲五郎は、母に、

「氷砂糖を下さい。」

とせがんだ。母は何氣なしに、

「もうありません。」

と答へた。これを聞いた仲五郎はほくそ笑んで、何か肯いてゐたが、母がなくなるのと、戸棚からその氷砂糖を取出して

氷砂糖のあるのを見出した

残らず食べてしまった。歸つて來た母がこれを知つて問ひたゞすと、

だつて

「だつて、ないものがなくなるわけはないでせう。」

と平氣な顔でやり返した。刀自は、さつき「もうない」と自分に嘘を言つたのを、仲五郎の言葉から深く恥ぢ省みて、自ら戒め、十歳の仲五郎に心から詫びたのであつた。

恥ぢ省みて

明治十年の西南の變には、東郷家の長男四郎兵衛實猗さむらひ、三男莊九郎實次は薩軍に投じたが實猗は負傷し、實次は戦死したので、戦友等はその屍を毛布マフに包んで假埋葬をして置いた。戦後、これ等戦死者の死骸を發掘して、祖先の墓地に埋葬しようとして、工夫たちは實次の假埋葬の場所へも向つ

西南の變
明治十年(二五三
七年)二月、私
學校の生徒に擁
せられた西郷隆盛
は、政府に問ふと
ころありと稱して
兵を擧げ、熊本城
を圍んだが、九月
敗れ、隆盛は官軍に
殺され、亂は平いだ。

た。ところが、刀自は工夫たちを斥けて、

くは(鍬)
遺骸を 觸れた
くない

「愛兒の遺骸をすき、くはの類で觸れたくない。」

借りず

見るからに

と、他人の力も借りず、たゞ一人兩手で土を掘返し、最後まで掘續けたので、終には指先は傷つき、血はほとばしり、見るからに痛々しかつたと、今でも郷里の一話になつてゐる。

なられてからは

かやうな烈しい性質ではあつたが、やがて元帥に夫人の輿入があり、自分は未亡人になられてからは、一家の事はすべて夫人任せとして、かりそめにも干渉がましい事はしなかつた。常に、

「善い妻となるのはもとより大切な事であるが、良い姑となるのは一層大切な事である。」

他を戒めてをられた

と言つて自身を省み他を戒めてをられた。こんな風だったので、元帥夫人との間は他から羨まれる程和やかで、家庭には朗かな笑が絶えなかつた。

後元帥が浪速艦長として高陞號を撃沈し、まづ日清戦争の火蓋を切つて以來連戦連勝少將に昇任した上常備艦隊司令官として大功を建てて凱旋された時、刀自は我が子を迎へて上座に直し、

「これ皆天子様の御威光で、何とも申し上げやうはございませぬ。」

と恭しく両手を突いてあいさつされたので、さすがの元帥も感極まつて平伏した。はらくと落涙されたといふ。

高陞號を云々
明治三十七年(二
五四年)七月二
十五日、清國政府
が英國からやつ
た高陞號といふ船
で陸兵二千餘を朝
鮮へ送らうとした
途中撃沈した。
日清戦争
明治二十七年六月
から同二十八年四月
月に至る日清兩國
間の戦役
申し上げやう。

二〇 東郷元帥とその母 その二

大正八年春、元帥が東宮御學問所總裁として、沼津御用邸に伺候した際、孝道に就いて、私にかう語られた事がある。

「孝は百行の基といふ事は、時勢がいかに變遷しようとも、決して變らぬ道理である。孝はもとく親を慕ひ、親を大切に思ふ至情から出るものであるから、これがないやうでは忠節を盡す事も、信義を守る事も、誠心誠意から出るはずがない。そればかりでなく、何事にも眞實が缺けるに相違ないから、よし一時の僥倖は得る事があつても、つまりは失敗に終るにきまつてゐる。自分は人物を觀察するに

私にかう語られた
變遷しようとも

これがないやうで

は、その親への仕へぶりを見るのが一番よいと思つてゐる。

この談話の内容は、決して新しい説ではないが、何事も實行の上でなくては口にしない元帥の言葉となると、其所に無限の價值を生じ肅然として襟を正さざるを得ない。

元帥は八十八の高齡に至るまで父母を慕うてをられた。をりにふれ、話題が兩親の事に及ぶと、あの嚴しい顔を微笑に解かせて、小兒のやうに、親の事どもを重い口でそれからそれへと語り續けられるのである。辭令を賜はり、または皇室から頂戴物などあつた時、何をかいても父母の靈前にこれを供へ、

正さざるを得ない
慕うてをられ
嚴しい顔を微笑に
解かせて

父母在す

明治十四年
二五四一年

が……人であつた。

憂なからしめたばかりか……

マッチ箱張りさへ

「父上、母上、これを頂戴いたしました。どうぞお喜び下さい。」と、目前に父母在す如き面持と、優しい言葉とで報告されるのであつた。

元帥がてつ子夫人と結婚されたのは明治十四年二月の事で、當時元帥は三十五歳、海軍少佐で天城艦副長の職にあつた。てつ子さんは鹿兒島の志士として有名な海江田信義の長女で、時に二十一歳、極めて温厚な謙遜深い人であつた。が、海軍軍人として、殆ど海上にあつて家事を顧みる暇のない夫君をして、後顧の憂なからしめたばかりか、貧しい家庭の經濟を切りもりして、暇々には母堂と力を併せて内職かせぎにマッチ箱張りさへやられたといふ。質素を旨とし、無駄

内職までして

を省くのは勿論、かうした涙ぐましい内職までして貯へた金で、麴町區上六番町に家附の土地を買取られた。東郷坂と名附けられて、今では東京名所の一つとまで數へられる今の元帥邸がそれである。



東郷元帥とその夫人

その時の引越の荷物が、二つの柳行李と若干の臺所道具だけだったといふ。夫人の苦心は並大抵ではなかつたらう。

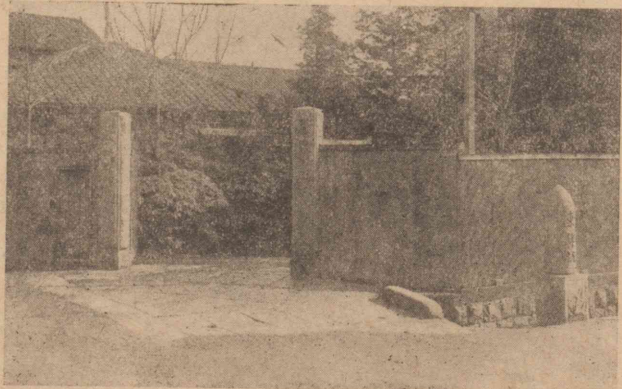
元帥はこのよき内助者を得られた。家庭に後顧の憂なく、君國の爲に盡されたのだが、婦人の忍従といふ事を何より

重く見られたとみえ

さう

はめようと

も重く見られたとみえ、私の四女が嫁いで行く際、告別に元帥を訪ね、將來の心得をとお願いしたのに對して、元帥から次のやうな懇な諭の御言葉を頂戴した。「世の中といふものは、何事もさう思ひ通りにはゆかぬものだ。そこで堪忍といふものが大切になつて来る。殊に家庭の事は理窟では通らぬ場合が多い。それを一々理窟にはめようとすると破綻が生ずるから、堪忍第一と覺悟せねばならぬ。こ



東郷元帥邸

来たやうだ

の節は婦人方が大層強くなつて来たやうだから、堪忍な
どいふ事は、時代遅れとして嫌はれるかも知れぬが、一度

日本海戦後

夷等かよせ

船をよつて

御稜威を

あげよ

皇國

平八郎

日本海々戦後
夷等かよせくる
船をよつても
御稜威をあげよ
皇國人
平八郎

自分が人の妻となつて、家庭に直
接の關係をもつやうになつたら、
獨身の時には無暗に強がつてあ
た者もしみじく思ひ當る事があ
るだらう。
さてその堪忍といふものは誠
心から發する事が多いので、先方
の御兩親や御良人を大切に思は
れたなら、自然堪忍強くなれるものだ。さうして幾久し

く繁榮ある事を望みます。

元帥の御言葉は一々御尤もである。中にも味はふべきは
「家庭の事は理窟で通らぬ場合が多い。それを一々理窟には
めようとする」と破綻が生ずる。との一句である。家庭によつ
ては極めて清純であり、圓滿でありながら、何所となく濫味
を缺いてゐるものをよく見受ける事がある。これ等は得て
主人なり主婦なりが理窟に陥りたがり、それを押通さうと
するところから起るのである。

元帥の言、まことに味はふべきであらうと思ふ。

味はふべきは

圓滿でありながら

得て

野口英世
醫學博士、理學博
士、ドクトル、オ
ブ・サイエンス、
ロックフェラー醫
研究所部長。福島
縣の人。昭和三年
歿、年五十三。
我がロックフェラー
研究所は、痛惜
する

野口英世博士が
倒れた
アクラ
英領黄金海岸に面
する小邑。

二一 偉人野口英世

「細菌學者野口英世の死によつて、我がロックフェラー研究所は、その最も卓越せる獨創的科學研究者の一人を、その最も敬愛されてゐる共働者の一人を失つた事を、世界のすべての人々と共に痛惜する。」

世界の醫聖と謳はれ、全人類の慈父と仰がれた野口英世博士が、西アフリカ、アクラの海岸に恐るべき黄熱病研究の犠牲となつて倒れた翌日、博士が籍を置いたロックフェラー研究所は、世界の學界に向つて以上の如き聲明書を發表した。アメリカのイブニング・ポスト紙は

「博士は日本に生れたとは言へ、その功績よりすれば全人類のものである。博士の勇ましい獻身的生涯は、現代の範とするに足る。まことに博士の抱いてゐた理想は、自分を犠牲にして濟世の道を歩んだ聖者のその如きものである。」

と、その長逝を哀惜した。

まことに博士野口英世は、日本を郷國とする世界人であつた。國境を越え、人種を超えて研究貢獻した博士の卓越した學勳は、千載永く傳ふべきものである。

博士は病理細菌學の專攻學徒として、その研究の範圍は殆ど全世界に互る廣汎なもので、研究發見の報告は實に百

聖者のそれ

傳ふべきものである

ロックフェラー研究
所は……もので
：観がある

ロックフェラー
一九二七年巨額の
基金を投じて、人
類の幸福増進を目
的とするロックフェ
ラー財團を興し
た。(西紀一八三九
—一九三七年)
フレキシナー
ドクトル・オブ・メ
ディシン。ロックフェ
ラー醫學研究所所
長、米國學術會議
委員長。(西紀一八
六三年—)

など(謎)

七十五篇の多きに上り、その多くは不滅の文献として、全學界の至寶となつた。

博士が終生の研究道場としたロックフェラー研究所は、アメリカの富豪ロックフェラー氏の美學によつて設立されたもので、現代科學界に雄飛する醫學の王國の觀がある。此所に集められた醫學者は、悉く各國の醫學界に萬丈の氣を吐く權威である。野口英世博士は恩師フレキシナー博士に選ばれて、その創成の業を輔けた。たとひフレキシナー博士にその異常の天才を早くも認められたとは言へ、また學界多年のなぞであつた蛇毒の研究にアメリカの科學界を驚歎させたとは言へ、異邦白面の一醫學者が、かうした所に乗出して

努力は……至つた

かつ(贏)

研究發見の跡は……
：語り盡し得ない

來た事その事は、アメリカ醫學關係者の驚異の的であつたに違ない。時に博士はなほ二十八歳の弱齡であつた。爾來二十餘年、博士の鏤骨彫身の努力は、醫學者としてのあらゆる



野口英世

最高の名譽をかち得るに至つたが、到底人間業とも思へぬ程の驚くべき精力と智力と根氣とをこめたその廣汎深遠な研究發見の跡は、いか

なるこの世の讚辭を以てしても語り盡し得ない。

フランスの一新聞紙は博士を讚へて、日本の生んだ近代の驚異と言つた。事實超人間的の偉大なその業績は、博士の

事は……立證され

生んだのは……國
土である

……ものは……研
究所であつた

生涯を飾つて永遠に輝く。それと共に、日本人が學術的に世
界を壓倒し得る事は、博士によつて明らかに立證された。科
學にとかく冷淡な傾のある日本人の中には、はからずも博士
のやうな偉人が出現したのである。されど博士を生んだの
は日本の國土であるが、彼を磨き彼を鍛へて、限りない光榮
を人類の上に享けしめたものは、實にロックフェラー研究所で
あつた。これを思ふ時、科學の尊重を高唱する心がとみに湧
き、科學者に對する敬意をたかむべき必要を痛感するので
ある。

博士は地球を墳墓として冷徹明澄の理性を深め、苦闘精
進した科學の使徒であつた。しかもその餘影には、聞くもゆ

博士は……歸來し
……喜んだ

かしい數々の挿話がある。博士は生涯日本人である事を誇
つた。そして故國をしのび、郷黨を思ひ、殊に骨肉を慕つた。日
本を出でて十六年、繁劇な公務に縛せられ、勃々たる研究心
に驅られて、日本學界の幾たびかの招聘、先輩知友からの切
なる懇慫にも應ずる事が出來ず、遂に歸朝の機會を捉へ得
なかつた。博士は、一たび故國から送られた一片の年老けた
母堂の小影に接するや、倉皇として歸來し、故山に母堂の健
在を喜んだ。博士はまた舊恩の人に絶大の敬意と感謝とを
常に捧げた。その少年の頃、學僕となつて恩寵を受けた舊師
に對しても、既に學界の高き權貴に立つ博士は、なほ生涯昔
ながらの呼捨を以て呼ばれる事を求め願つたといふ。或は

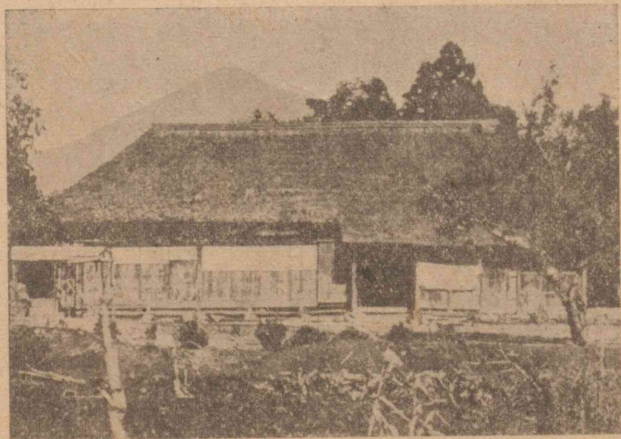
猪苗代
福島縣耶麻郡猪苗
代町

…たら…であ
らう

母校猪苗代高等小學校以來、薰陶後援到らざるところなかつた良師に對しては、自分は若しかの人の見出されなかつたら、牛追太郎で一生を終つたであらう。と、終生その恩に感謝したといふ。これ等は共にその人格の麗しさと清らかさとおのづから感じさせる話柄ではないか。

やしの森繁る南米エクアドルのギヤキル市に立つ青銅の標面に、

エクアドル
南アメリカ西北部
の共和國



野口英世の生家

業半ばにして

生地は…一寒村
である

「一千九百十八年七月二十四日、ロックフェラー研究所のメンパー、ヒデオ・ノグチ——日本の細菌學泰斗——黄熱病の原因を此所に始めて見出す。」

とある。先驅の勇者は業半ばにして悉く倒れたが南アメリカ大陸百千年の繁榮の途は、かくして開かれた。けれども同じ熱帯の西アフリカに、更に兇惡な黄熱病が猖獗を極める事を知つた時、博士野口英世は敢然としてこれが征服を志し、傷ましくも天職に殉じた。人道の父はかくして人類愛の前に、悲壯な犠牲となつたのである。

偉人野口英世。その生地は福島縣耶麻郡翁島村といふ猪苗代湖畔の一寒村である。

故郷の停車場
磐越西線翁島驛。

自傳文

母を故國に省みて

野口英世

母
名はシカ。

單純な動機
簡單な原因

汽車が故郷の停車場へ近附くにつれて、私の心は躍つた。思へば十五年の歲月、親しむ事の出来なかつた懐かしい山や、川や、森や、停車場前の湖や——私は幾たびか延上りくして、車窓から遙かに小さなプラットフォームへと眼を放つた。其所には數多くの出迎へ人に擁せられて、私の母もゐた。

母。この母あればこそ、私はかうして十六年ぶりに再び故國の土を踏んだのである。懐かしい母、世にも尊い母、自分を生み、育て、いつくしみ、今の位置に上せてくれた母——その母の顔を一眼見たさの單純な動機から、私はかうして歸つて來た。

福島縣耶麻郡翁島村——其所が私の生れ故郷である。祖先の墓のある土地である。私の最初の、而して唯一の教育を受けた小

薄倖
ふしあはせ。

幻覺
まぼろし。

學校の所在地である。或時は身の薄倖に泣き、或時は發奮の志を立て、幾たびか人知れぬ涙をしぼつた故郷なのである。昔ながらの岡、森、湖水、それが今や、一種幻覺の中の光景のやうに、私の眼には異様に映じて來る。不思議とも、奇妙とも、名付けやうのない感想がひし／＼と身を襲つて來る。三十年前の自分の姿が全く別人のやうに浮んで消えた。

「あゝ、おれはかういふ土地から出て行つたのかなあ。」

私は覺えずつぶやくのであつた。浦島の子が故郷へ戻つた時の驚異程ではなくとも、私は自分の眼、自分の耳をいぶかしまずにはをられなかつた。

母はさすがに氣丈夫であつた。或日本の新聞では、私と母が相擁して泣いたと書いたさうだが、それは全く嘘であつた。泣くどころか、母は涙一滴眼に浮べなかつた。私は今更に母の剛膽に驚

剛膽
心のしつかりして
ゐること。

母を故國に省みて(自修文)

かされた。その氣象に勵まされた。

「とてもこの世では會へないと思つた——」

かう言つて、しかし母は飛立つばかりに喜んでをられた。村の歡待、若松市での醫會、市會、教育會、それから學校の方々の手厚い歡迎を受けた中にも、私は郷里に於ける恩人——小林榮、渡邊鼎兩氏の事は須臾も胸を離れなかつた。船が横濱に入つた時も、その方々はわざ／＼横濱まで出迎へに來て下さつた。甲板の上から眼鏡でその恩人たちの顔を認めた時、歡びの血潮は私の全身に湧いたのであつた。しかしながら、私が現在に至る種を蒔いてくれたのは、やはり



野口英世と母

須臾も胸を云々
ちよつとの間も忘
れなかつた。

邪氣なき嘲笑
悪氣のないあざけ
り。

母であつた。私が何物をか持つてゐるとするならば、その芽を枯らさずにつちかひ養つてくれたのは、やはり母であつた。母は實に氣丈夫な勇氣のある人である。

私の生家は貧しかつた。小學校へ通つてゐる頃も、家に戻るとすぐ私は母を助けて種々の仕事を手傳つた。殊に私は稚い時分、ふとした過失で手の指に火傷を負つた。指と指とが抱合してゐて、取分けその點で學校朋輩にも嘲けられた。自分で言ふのは、かしいが、學校での成績は良かった。しかし、友だちの邪氣なき嘲笑は、身にしみ／＼と辛く覺えた。

かゝる間も、母は深く私の身の上を氣遣つてくれた。學校でも良い教師へ頼んで、何かと勉強の便宜をはかつてくれた。

小學校を出ると、私はすぐと猪苗代小學校の助教員になつた。俸給も月三圓かそこらであつた。家の生計も貧しかつたが、母は

私の給料に手を著けるやうな事はなかつた。私は給料を丹念に貯へて日本外史を買つて讀んだりした。その時は母も驚き、且共に喜んでくれたのを覚えてゐる。猪苗代の小學校長は即ち小林榮氏で、私は後々もこの人に取立てられたのである。

或日、私は若松にドクトル渡邊鼎氏の門を叩いた。いかにもして手指の切開を行つてもらはうとした。渡邊氏は私の手を診察すると、

「なあに、手術さへすればすぐ治るよ。」

と言はれた。この一語、私は天の福音として聞いた。而も手術の結果は果して良好で、従來は物もつかむ事が出来なかつたのが、りっぱに役立つやうになつた。私は歡喜にふるへた。希望の光明は瞬間に私の胸を明るくした。

「よし、おれも一つ醫者になつて見せる。」

天の福音
天からの幸なしらせ。

藥局生
醫者に雇はれて藥の調合をする人。

血脇氏
血脇守之助。東京齒科醫學專門學校の設立者、校長。當時は高山齒科醫學校の幹事。

義俠
自分の名譽、利益を顧みず、人の爲に盡すこと。

私は身ぶるひしてつぶやくのであつた。その時、私は十六歳であつた。

それから私は渡邊氏の藥局生として、夜の目も寝ずに醫學の研究にかゝつた。傍ら語學の勉強を始めて、英、佛、獨の各國語を殆ど獨學で習得した。かやうにして私は渡邊氏に二箇年身を寄せてゐた。この間の渡邊氏の親切、小林氏の指導を忘れる事は出来ない。

私が愈、東京へ出る決心をうち明けた時は、小林校長も、渡邊ドクトルも、翁島の母親も、心から賛成してくれた。渡邊氏は知人血脇氏に宛て、紹介狀を認めてくれた。同級生の誰彼も寄附金を募つてくれた。小林氏も身に不相應な餞別を祝つてくれた。

かくて私は故郷の山河を後にして、明治二十九年四月、始めて花咲く都の土を踏んだ。血脇氏は義俠に富んだ人で、渡邊氏の紹

母を故國に省みて（自修文）

一介の田舎書生
つまり一個の田
舎學生。

介狀を懐にしたこの一介の田舎書生を、快く引受けて玄關番に
してくれた。

爾後、私は血脇氏の指導の下に研究の歩を進めて、その年の十
月には、前期の免狀を得、翌年十一月には後期の試験に及第した。
それが學術と實地と一度に及第したのであつた。

續いて血脇氏の口添で順天堂醫院の助手となり、更に傳染病
研究所へ入つたのは明治三十一年の五月であつた。翌年には海
港檢疫官補として横濱檢疫所へ行つた。

支那に渡つたのはその十一月で、支那には、八九箇月滞在して
歸朝した。越えて三十三年十二月、年來の希望がかなつて、愈、渡米
の途に就いた。

渡航費に就いても、血脇氏には言ふに言はれぬほどの世話に
なつた。

順天堂醫院
東京市本郷區お茶
水にある。

傳染病研究所
東京市芝區にある。

海港檢疫官

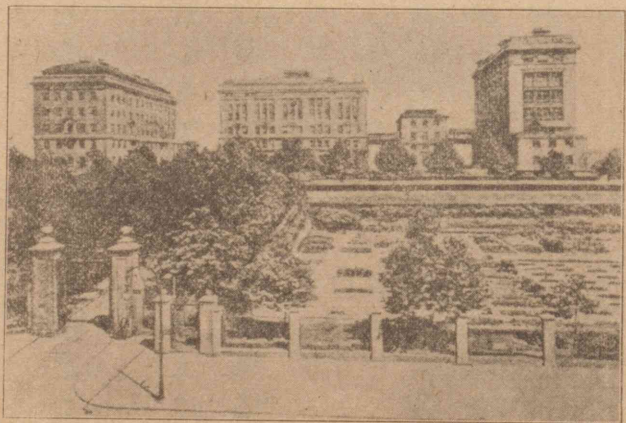
傳染病の豫防の爲
に對して、病菌の船
有無を検する役人。

ペンシルバニヤ大
學
アメリカのフィラ
デルフィヤにある
綜合大學。

端なくも
思ひがけなく。

肝煎
骨折。

廣い自由な希望に満ちた世界。そのアメリカ大陸に渡つて、私
はまづペンシルバニヤ大學へ行つ
た。其所の圖書館に入つて二三箇月
を一心不亂に讀書した。やがて一つ
の論文を書いて見た。それが端なく
も大學教授たちの認むるところと
なつて、同大學の病理學教室の助手
となる事が出來た。偶、ロックフェラー研
究所長フレキシナー博士の肝煎で
蛇毒の研究を以てカーネギー研究
所に入り、英、獨、佛三國を経て歸米後、
三十七年愈、ロックフェラー研究所に入
所し、七人しかないメンバーの一人に推された。爾後今日まで其



所究研學醫ーラェフクッロ

母を故國に省みて(自修文)

所の仕事に従ひ、自分の研究を續けてゐるのである。

世間の人はよく言ふ。

「野口は海外に渡つてから非常に苦心をして、今日の位置と名譽とを得たのである。」

と。しかしながら、私は決して格段の苦心も努力もした覚えはない。私はたゞ楽しんで學んだのみで今日あるを得たのである。

「あの時はさぞ苦しかつたらう。」

「さぞつらかつたらう。」

などとよく人が言ふ。成程著る物がなくて、人の集る席へも出られなかつた事がある。食ふに困つた事もある。しかし、私は心から「つらい」と思つた事はない。何時も自分の位置と境遇とに於ける正當の仕事をして來た。

「今度こそ最後のどんづまりだ。」

觀念する
あきらめる。

と觀念しかける時に、何時も義侠な人が現れたり、または境遇がひらけたりして、行手に榮ある光明を望む事が出來たのである。世間を見ると、自分の位置に適應するやうにと働く人がある。待遇が悪いからと言つて最善を盡さぬ者がある。しかし、私はそれと反對だ。番頭なら番頭としての自分の職責を果すべく、官吏なら官吏として自己の良心にやましからぬ勤勞をなすべく、學生ならば學生としての本務をあくまでも盡さねばならない。これ等は我が日本の學生諸君が、くれぐれも今から心がけて置かねばならぬところであらう。

二二 蟲 賣

伊良子 清白

「松蟲、鈴蟲、くつわむし、

蟲めせ蟲めせ、かごも候。」

伊良子清白
詩人、醫者。名は
暉造。明治十年鳥
取縣に生れた。

八瀬
京都府愛宕郡八瀬村。

高瀬
高瀬川。京都市内の賀茂川、宇治川の間に南北に通ずる溝渠。

四條小橋のたもとには、
八瀬の蟲うり早も出る。

旅籠の軒のみぎはには、
水の高瀬のせゝらぎや。
柳は暗く月明く、
蟲のこゑく、流れゆく。

都大路のともし火も、
秋の野らなる蟲の聲。
残る暑さの石疊、
さすがに露のおきまさる。



賣 蟲 伊藤小坡筆

徳富健次郎

小説家。蘆花と號
した熊本縣の人。
昭和二年歿、年六
十。

たゞ三坪

言ふ……と

膝を容るべく

此所にも照れば四
季も來り

空は秋風人波の、

上吹き越ゆる涼しさに、

「蟲めせ蟲めせ」蟲うりの、

聲も消えゆく高瀬川。

省く

二三 我が家の富

徳富健次郎

家は十坪に過ぎず。庭はたゞ三坪。誰か言ふ「狭くして且陋
なり」と。家陋なりと雖も膝を容るべく庭狭しと雖も仰いで
碧空を望むべく、歩して永遠を思ふに足る。

神の月日は此所にも照れば、四季も來り、風雨、雪、霰かはる

観ずれば……覺ゆるなり

がはる至りて興淺からず。蝶來りて舞ひ、蟬來りて鳴き、小鳥來りて遊び、秋蛩また吟ず。靜かに觀ずれば、宇宙の富は殆ど三坪の庭に溢るゝを覺ゆるなり。

霞める空

庭に一株の老李あり。春四月の頃ともなれば、青白き花開きて樹に滿つ。風ある日には、薄青く霞める空より、白き花ちらちらと舞ひて、一庭須臾に雪を散らす。

見るがうちに

隣家に花樹多し。風に隨ひて飛花我が庭に落つ。紅雨霏々、白雪紛々、見るがうちに滿庭花の衣を著く。子細に見れば、桃の花あり、櫻の花あり、椿の花あり、山吹の花あり、李の花あり。庭隅に一株のくちなしあり。五月闇鬱陶しき頃、香しき白花を開く。主も妻も無口なれば、この花の我が家に開くは宜

くちなし(山梔、梔子)

無口なれば

宜なりけり

なりけり。

ゆがむ(歪)

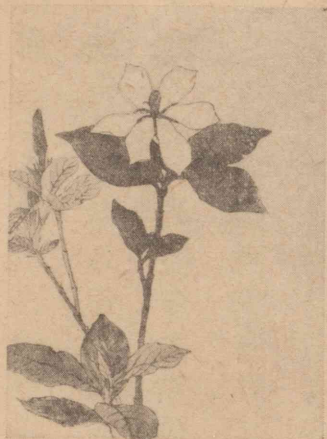
直かれ

老李の背後に一株の梧あり。碧幹亭々として少しのゆがみなく、我が如く直かれと教ふるに似たり。梧桐と手水鉢の

側なる

側なる八手とは葉闊うして、我

喜ばせん男の子



(鑑圖花萬) しなちく

が家の雨聲を多からしむ。李熟して白粉ふきたる琥珀玉の滾滾と地に落つる頃は、與へて喜ばせん男の子一人欲しと思ふ

起りぬ

心も起りぬ。

何時しか

つくつくぼふしの聲に世は何時しか秋に入りて、山茶花咲き、三尺ばかりの楓も紅に燃出で、たゞ一株前の家主の植

蛻巖

梁田蛻巖。明石藩の儒者。寶曆七年(一四一七年)歿。年八十六。

獨り憐む云々

蛻巖の九月九日の詩句。恥づらくは……事を

一夜にして

なりぬ

紅葉さへ落添ひて人は言ふなる錦

ゑのこしたる黄菊も咲出づ。名苑の花美しと言ふとも、秋のあはれ閑寂の趣は、卻つて我が庭の一枝にあるべし。蛻巖の翁ならば、「獨り憐む細菊荆扉に近きを」とや吟ぜん。恥づらくは「海内の文章布衣に落つ」と唱すべき身にあらざる事を。屋後に一株の銀杏あり。秋深くして満樹金よりも黄なり。木枯の風起れば、その葉翩々として飜り落つ。半夜夢さめて雨かと疑ひ、曉に起きて戸を開けば、庭は一夜にして金色となりぬ。屋根も、ひさしも、手水鉢も、所として落葉ならざるはなく、紅葉さへ落添ひて、寸金と人は言ふなる錦を、我は庭に敷詰めぬ。

木の葉落盡してはさすがに寂しげなれど、日影、月影愈、多

くなりて、空を見星を見るに障り少きは嬉し。

二四 清淨の國

大町桂月

我が國の特質は少からざれども、特質中の特質とも言ふべきは、清淨の國なる事なり。日本國民は一般に清淨の美を愛す。その心清淨なり。その衣、その食、その家清淨なり。その國一體が清淨なり。清淨の美を解せざる者は到底日本を解するを得ざるなり。

敷島の大和心を人間はゞ

あさ日ににほふ山櫻花

この歌が日本人一般に愛誦せらるゝは、國民精神の清美

大町桂月
文學者。名は芳衛。高知縣の人。大正十四年歿。年五十七。

解するを得ざるなり

これだけ
よき道具
の
がの

を歌ひ出でたればなり。一體朝は一日中にて最もすがくしき時なり。空にいさゝかの曇もなき時、東天に朝日の輝き出づるは實に清爽なるものなり。その清暉に櫻花中の粹たる山櫻のばつと映發せるは、尙更にすがくしきものなり。朝晴天日の出、山櫻これだけのよき道具がそろはゞ、何人か爽快を覺えざるべき。これ即ち大和魂の本體なり。大和魂は即ち清淨の粹なり。櫻花は散りぎはが潔し。日本男兒の死を惜しまざるに似たりなどと言ふは、枝葉の事のみ。

田子の浦云々
萬葉集卷三、山部
赤人の歌。

田子の浦ゆうち出でて見れば眞白にぞ

ふじのたかねに雪は降りける

綠波一面鏡の如き田子の浦、そのあなたにいづこより見

月雪の云々
江戸時代の俳人、
榎本其角の句。

ても形の變らざる扶桑一の靈山の八朶玲瓏天を擎げて立てるは、こもまた清淨の極みにあらずや。この歌が名歌として世に喧傳せらるゝも、畢竟この美の琴線に觸れたればなり。

月雪の中や命のすてどころ

積雪白うして四邊に聲なく、十四夜の寒月ひとり天にさえたり。この夜、この雪を踏み、この月光を浴びつゝ、氷刃を煌かして亡君の仇を報いんと討入るは、決死の四十七烈士。天も清し。地も清し。人も清し。當夜、吉良邸の隣屋敷にて催されし俳會に列せし其角その人は、元來血性の快男子にして、清淨の美を身解せる人なり。而して義士の中に加れる大高子

其角
芭蕉の門人。近江
の人。寶永四年
（一七二七年）歿、
年四十七。
大高子葉
大高源吾。

葉は實にその俳友たり。月清きその雪の夜、無量の感慨は發してこの十七文字となる。實によく復讐の眞況と本體とを捉へ得て、清淨の美を極めたりと謂ふべし。

歌も、俳句も、名句と稱せらるゝものは、多くはこの清美を捉へたるものなるが、その他の美術、文藝、一としてこの心の結晶ならざるはなし。花に對する感じの如きもまた然り。近時、外國趣味の入來るにつれて、妖艶なる草花も輸入せられたれど、梅や、櫻や、蓮や、菊や、水仙や、昔も今も日本國民の一般に愛する花は、必ずや清淨なり。また建築に於ても然り。日光の東照宮、淺草の觀音堂を見る時、我々日本人はたゞ華麗を感ずるのみにして、尊さを感じずる事薄し。然るに一たび去つ

神宮に詣でんか
西行の歌
「なにごとのおは
しますかは知らね
どもかたじけなさ
に涙こぼるゝ」



大町桂月

て伊勢の神宮に詣でんか、千木高知れる建築、清淨の美を極めて、そゞろに西行の歌のしのぼるゝを覺えずんばあらず。若し神宮に向つて壯大を求め、華麗を求むる者あらば、これ眞の日本國民たる素質に缺けたる所ある者と言はざるべからず。滄海の中にありて山青く水清き、我が日本は、土地その物が既に清淨なり。開闢以來未だ曾て外國に汚されざる我が國の歴史が既に清淨なり。他民族の血液を多く混ぜざる我が民族の血統が既に清淨なり。しかのみならず、我が國民は善を好み、惡を憎み、正に就きて邪を排

風流さへ解し
あはれものを
知る
人間清浄なる
なり

し、直を愛して曲を嫌ひ、弱を扶^{タス}けて強を挫^{クサ}き、よく忠に、よく孝に、よく義に、よく勇に、風流さへ解して、ものあはれを知れる清浄なる人間なり。我が日本が古來東海の君子國と呼ばるゝも、宜^{ヨシ}なるかな。

二五 祖先を崇び家名を重んず

社會學上から上代の我が國家を見れば、いはゆる神祇政治であつた。即ち祭政一致の状態で、治者は神祇、上も神もひとしくカミであつた。政治は即ち祭祀で、ひとしくマツリゴトであつた。また一方から見れば、宗族政治で、宗家が分家を支配したものであつた。公は即ち大家^{おほやけ}であつた。かういふ事

來つて

は強ち我が國に限つた事ではない。原始社會には幾らも類例のある事である。たゞそれが太古から今日まで持續し來つて、立憲政治の今日まで残つてゐるといふ事が、甚だ珍しいのである。社會進化論の上に一特例をなしたものと云つて宜しい。支那の文明を吸収し、印度の教義を採用して、神儒佛合體で國家を治めるといふ聖徳太子の方針で、今日まで變遷をなして來たにも拘らず、この太古の政體に伴なふところのカミ、オホヤケに對する尊崇心、敬虔の心即ちマゴコ口を今日まで少しも失はず、それで何等の争亂もなく、軋轢もなく、更に西洋の民主主義を入れて、立憲政體をなし得たといふのが、面白いところである。この昔ながらの國體で、今

…行けるといふのが…強みである

日の世界の間に闊歩して行けるといふのが我が國民の強みである。

さてこの神祇政治、宗族政治の根本となつてゐるものは、言ふまでもなく祖先崇拜であつて、祖先の功業を尊崇してこれを畏敬し、これを仰慕する念がなければ、もとよりこのやうな政體の成立つわけがない。神話の神々は、一方に於ては自然現象を代表されると同時に、一方では祖先の大功業者たる人々と一致されたのである。天照大神は日の神、月讀命は月の神、素戔嗚尊は恐らくは風の神であらうが、これと同時に、我が民族のうちで、殊にすぐれた尊むべき方々であつたに相違ない。かういふ祖先の人々を祀つて御祭をする

これと同時に

即ち…といふ事が

といふ事、即ち共同の祖先を崇拜して、そこに一致團結の政治が行はれるといふ事が、神祇政治、宗族政治の本體である。天照大神が八咫鏡を天孫にお下しになつて、「コレヲ視ルコト吾ヲ見ルカ如クセヨ」と仰せられたのは、祖先崇拜といふ事を明らかにされたのである。即ち三種の神器をお承傳へになつた御方が、祖先の正統、政治上の元首で、いはゆるカミで、且オホヤケであるのである。それ故、皇位の繼承には、三種の神器が最も大切な物になつてゐる。語を換へて言へば、我が國體上からは、どうしても祖先崇拜といふ事を忘れてはならぬのである。

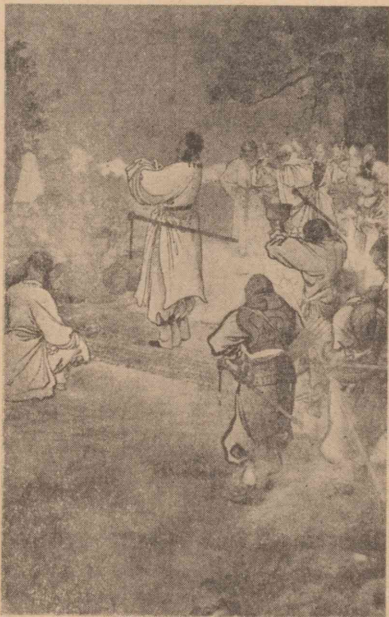
祖先崇拜は支那人にもあるが、支那などの革命の國では、

祖先崇拜は…あるが

これが…意味を
もなさぬ

ギリシヤ(希臘)

これが國家と結び附いては何の意味をもなさぬ。ローマやギリシヤにもあつたが、今は跡方もない。日本では昔の神祇政治、宗族政治の政體が今日まで連續してゐるから、祖宗を尊



鳥見山 (伊藤龍涯筆)

み、これを祭る事は、大昔から今日まで、政治とは離れられぬ關係をもつてゐる。神武天皇が御即位式に神籬を鳥見山に作つて、祖

宗をお祭りなされたのは、即ちこれがためである。今日でも毎年一月四日の政始まつりごとのはじめには、「先づ神宮ノ事ヲ奏ス」といふこと

鳥見山
奈縣良磯城郡城島
村外山であるといふ

大寶令
第四十二代文武天皇
の大寶元年(一三六一年)に出来た。

これが爲

臣民たる者

があるが、これは大寶令時代からの定りて、これを以て單に昔からの習慣と見るのは間違である。今日でも國家的意味のある事である。宣戰、講和の詔敕を發し給ふ時に、神宮にお告げになるのもその意味からである。宮中に賢所があつて、海外へ出向く人、または歸朝した人などが拜謁と同時に參拜を仰せ附けられるのも、この政體の上からの意味をもつてゐる。日本は神國なり」と昔から人の言ふのはこれが爲である。神と言つても、後世に發達した各派の神道の神を言ふのではない。全く宗教を離れての問題である。信仰の問題たる宗教の自由といふ事には何等の關係がない。苟も日本の國土に生れて、日本の臣民たる者は、カミとオホヤケとに對

する真心から、祖宗の靈を尊むといふ次第に外ならぬのである。太古からの國體に伴なつた事である。

女子新國文 改制新版 卷三 終

國語假名遣表

<p>あゐ(藍)</p> <p>くれなる(紅)</p> <p>あぢさゐ(紫陽花)</p> <p>うなる(髻髪)</p> <p>かたる(乞食)</p> <p>くわる(慈姑)</p> <p>なる(地震)</p> <p>なる(率)</p> <p>まゐる(參)</p>	<p>以外のものはいと知るべし。</p>	<p>あゐ(井)</p> <p>ゐど(井)</p> <p>ゐづつ(井筒)</p> <p>ゐなか(田舎)</p> <p>ゐもり(蝶螺)</p> <p>ゐ(居)</p> <p>ゐざり(膝行)</p> <p>かもゐ(鴨居)</p> <p>しまゐ(閨)</p> <p>くもゐ(雲居)</p> <p>くらゐ(位)</p> <p>しばゐ(芝居)</p> <p>とのゐ(宿直)</p> <p>とりゐ(鳥居)</p> <p>まどゐ(團欒)</p> <p>もとゐ(基)</p> <p>ゐ(猪・亥)</p> <p>ゐのこ(豚)</p> <p>ゐのし(猪)</p> <p>ゐくび(猪首)</p> <p>いぬゐ(乾)</p> <p>ゐ(蘭)</p> <p>ゐろり(爐)</p>	<p>語の上に来るひはないからこれ</p>
<p>い(寝)</p> <p>あさい(朝寝)</p> <p>いびき(鼾)</p> <p>おい(老)</p> <p>くい(悔)</p> <p>むくい(酬)</p> <p>音便によるもの</p> <p>かうがい(筭)</p> <p>かい(權)</p> <p>きさい(后)</p>	<p>語中、語尾に来るものは、前掲のものと次記のいとの外はひと知るべし。</p>	<p>い</p>	<p>語の上に来るひはないからこれ</p>
<p>え(繪)</p> <p>えま(繪馬)</p> <p>えのぐ(繪具)</p> <p>ともえ(芭)</p> <p>え(餅)</p> <p>えぶくろ(餅袋)</p> <p>え(機)</p> <p>えど(機土)</p> <p>えじ(衛士)</p> <p>えぼし(烏帽子)</p> <p>えんじゆ(槐)</p> <p>えむ(笑)</p> <p>えがほ(笑顔)</p> <p>えくぼ(籃)</p>	<p>え(繪)</p> <p>えま(繪馬)</p> <p>えのぐ(繪具)</p> <p>ともえ(芭)</p> <p>え(餅)</p> <p>えぶくろ(餅袋)</p> <p>え(機)</p> <p>えど(機土)</p> <p>えじ(衛士)</p> <p>えぼし(烏帽子)</p> <p>えんじゆ(槐)</p> <p>えむ(笑)</p> <p>えがほ(笑顔)</p> <p>えくぼ(籃)</p>	<p>え</p>	<p>語中、語尾に来るものは、前掲のものと、次記のえの外はひと知るべし。</p>
<p>えつば(笑壺)</p> <p>えふ(醉)</p> <p>える(彫)</p> <p>えぐる(剝)</p>	<p>語の上に来るえはこれ以外はえと知るべし。</p>	<p>え</p>	<p>語の上に来るひはないからこれ</p>
<p>え(兒)</p> <p>きのえ(甲)</p> <p>ひのえ(丙)</p>	<p>え(兒)</p> <p>きのえ(甲)</p> <p>ひのえ(丙)</p>	<p>え</p>	<p>語の上に来るひはないからこれ</p>

つちのえ(戊) かのえ(庚) みづのえ(壬) え(枝・柄) えずえ(下枝) ながえ(鱧) え(江) いらえ(入江) ふえ(笛) のどぶえ(吭) ひえ(稗) ひえどり(鴨) ささえ(蝶螺) ささえ(小筒) あまえ(甘) いえ(癒) いばえ(嘶) おびえ(脅) おほえ(覺) きこえ(消) こえ(越) やまごえ(山越) こえ(肥) しもごえ(下肥) すえ(脛) はえ(映)

ゆふばえ(夕映) はえ(生) ひこばえ(癩) ふえ(殖) ほえ(吠・吼) とをほえ(遠吠) みえ(見) もえ(燃) もえ(萌) もだえ(悶) き を(男・雄 夫・牡) をのこ(男ノ子) をす(牡) をつと(夫) をとこ(男) をとり(媒鳥) をひ(甥) たけを(猛男) ますらを(丈夫) みやびを(風流男) さつを(獵夫) さをし(小牡鹿) めをと(夫婦) を(尾) をばな(尾花) を(緒)

をどし(緘・緒通し) たまのを(玉ノ緒) ほぞのを(臍帶) はなを(鼻緒) を(麻・苧) をけ(桶・苧筒) をだまき(苧環) をがら(麻幹) を(小) をち(伯叔父・小父) をば(伯叔母・小母) をとめ(少女) をす(小籬) をか(岡・丘・陸) をかほ(陸稻・岡穂) を(峯・岑) をのへ(尾上) をき(荻) をこ(愚) をかし(可笑) むらを(村長) しでのたを(四手田長) をさ(箴) をさ(長) をし(鴛鴦) をそ(獺) かはを(獺) をの(斧)

てをの(手斧) をみな(女) をみなへし(女郎花) をち(遠) をちこち(遠近) をととひ(一昨日) をり(檻) をり(節) をろち(大蛇) をがむ(拜) をかす(犯・冒) をさむ(治・修・納) をどる(踊・躍) をし(惜・愛) をし(惜・愛) くちをし(口惜) いとをし(可愛) をのく(慄) をはる(終) をめく(叫) をる(居) をる(折) をし(折敷) たをる(手折) しをる(葉) しをる(莖) つよをり(九十九折)

をさなし(幼) をさをさ(大抵) 語の上に来るをはこれ以外になし。

あを(青) あをがひ(青貝・螺鈿) いさを(功・績) うを(魚) いを(魚) かつを(鱧) しらを(白魚) さを(竿) つりさを(釣竿) みさを(擲) たをやか(嬋妍) たをやめ(手弱女) とを(十) みを(滯) わさを(俳優) かを(香) まを(申) しを(可憐) やを(徐) 語中、語尾のをはこれ以外はほと知るべし。

わ(廓・輪・曲) くるわ(廓) うらわ(浦曲) つわ(響) わけ(譯・分) いひわけ(言分) のわけ(野分) わさ(業) しわざ(仕業) ことわざ(諺・言葉) わた(腸・綿) はらわた(腸) このわた(海鼠腸) わり(割) ことわり(理・事割) あわ(泡・沫) みなわ(水沫) いわし(繭) くわぬ(慈姑) こわ(聲) こわね(聲音) こわい(爽) さわ(爽) しわ(皺) たわし(東蕒子) たわやか(嬋妍) たわやめ(手弱女) たわら(俵) ひわ(羈)

あわつ(周章) かわく(乾・渴) さわぐ(騒) しわし(吝) すわる(坐) たわむ(撓) よわし(弱) 語中、語尾のわはこれだけである。他はほと知るべし。

すぢ(筋) すぢみち(筋道) なんぢ(汝) なめくぢ(蛞蝓) ねぢ(螺旋) ひぢ(泥) ふぢ(藤) もみぢ(紅葉) わらぢ(草鞋) ちぢむ(縮) 前掲の外はほと知るべし。

すずな(菘)
すずめ(雀)
すずり(硯)
ねずみ(鼠)
はす(筈)

ゆはち(弭)
はすみ(機)
みみず(蚯蚓)
もず(百舌鳥)
すず(誦)

すずし(涼)
すずろ(漫)
ずるし(狡猾)
たたずむ(佇)
たたずまひ(様子)

なずらふ(準)
ひずむ(歪)
ます(混・交・混)
かならず(必)
前掲の外はづと知るべし。

昭和十一年六月二十七日
昭和十一年六月二十七日
昭和十一年六月二十七日
昭和十一年六月二十七日
昭和十一年六月二十七日
昭和十一年六月二十七日
昭和十一年六月二十七日
昭和十一年六月二十七日
昭和十一年六月二十七日
昭和十一年六月二十七日



女子新國文 改制新版

定價 卷一 八金六拾錢
卷九 十金五拾八錢

編者 芳賀 矢一
訂補者 橋本 進吉
發行者 東京市神田區神保町一丁目三番地
會社 富山房
代表者 同所富山房社長 坂本 守正
印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
寺井 藤左 工門

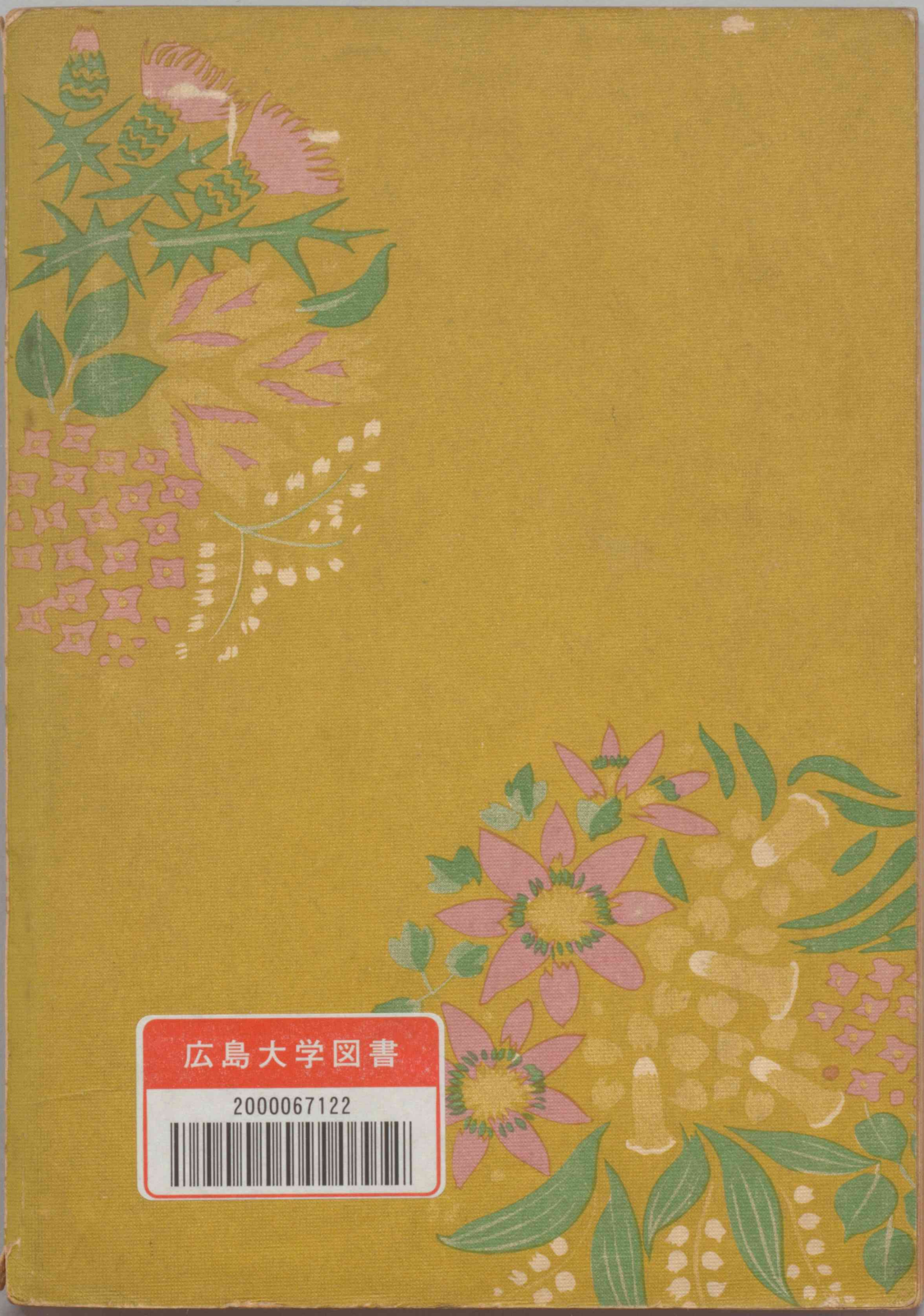
發行所

(明治二十九年六月設立)

東京市神田區神保町一丁目三番地
會社 富山房

電話神田代表二二二二
振替口座東京五〇一





広島大学図書
200067122
[Barcode]